

ゆれる車の音

九州テキ屋旅日記



作 中島淳彦 演出 鶴山仁

文学座公演

登場人物

金丸 重蔵
金丸 敏子
金丸 真弓

上原 丈太郎
上原 雄太郎

小玉 仙一

有江 孝文

田畑 千代子
大田川 宏

寺原 しのぶ
寺原 あさみ

舞台

宮崎県日南市油

一 走る車

夕暮れ時、車（バン）が走っている。

運転しているのは敏子、助手席に重蔵、後部座席から身を乗り出すように真弓。やがて車は乙姫神社の駐車場に停まる。ほっかむりをした重蔵、

敏子、真弓、車から降りる。呆然と辺りを見回す重蔵。

真弓 ・・なんか寂しいところやね。ここが油津？

敏子 あんた場所間違えちよるんやないと？

重蔵 馬鹿、二十年ぶりとはいえ、自分の故郷やど、間違えるもんか。真弓、う

ろちよるすんなよ、ちいせえ町じゃヨソ者は目につくど。

真弓 父ちゃんの故郷やろ？

重蔵 ・・。（ほっかむりを外す）

敏子 こんげ人通りが少なかつたやろか？

重蔵 丁度晩飯時やろ。

敏子 明日乙姫様の祭りやろ？

重蔵 祭りの前の静けさやろ。

敏子 日にちを間違えちよらん？

重蔵 テキ屋が祭りの日を間違えちたまるか。

敏子 そりやそうやけど、所場割りの世話役もおらんし。他に車もないし。（社務所を見て）思い出した。私たち頃は、ここで着到順に所場割りを・・まあ、古ぼけて。

重蔵 乙姫様の縁日といえば南九州一帯からテキ屋が集まって、そら賑やかやつたもんや。所場割りを待つテキ屋の列がずらあつとつながって、それを親父が眼光鋭く捌いちよつた。

敏子 思い出すねえ、いい時代やった。元々この油津の所場はあんたのお父さんのもんやつたとやもんね。

重蔵 まっこつ・・何で誰もおらんとやろう・・。

敏子 さあ・・とにかくあんたしっかりせんと。

重蔵 わかつちよる。

敏子 お父さんの所場をすっかり取り返さんと。テキ屋の所場は命と同じ。

重蔵 わかっちゃよる。

敏子 お父さん、もう長くはないとやから、何とかしてあげんと。

重蔵 言われんでもそんげなことはわかっちゃよる。

真弓 (土手に登り) 港が見える。ここまで海のおいがする。

敏子 昔は賑やかやったとよ。戦前はマグロがたくさん上がって、漁師がたくさんおつて。

真弓 想像もできん、なんか寂しい。

重蔵 来るのが遅すぎたやろか、所場割りもう終わってしもたとかもしれんね。

敏子 あんたがのろのろしちよるから。

重蔵 うるさい。

敏子 気が重いとやろ。自分の所場を追い出されて二十年ぶりに帰って来たともんね。

真弓 お父さん、どんげして所場を取り返すつもり？

重蔵 ・色々考えはある、子供は黙っちゃよけ。

敏子 いざとなったら力尽くで取り返さんと。

重蔵 気楽にそんげなこというな。とりあえず乙姫様に手を合わせてくる。お賽銭。

敏子 はいはい。(千円渡す)

重蔵 おい、こら多いやろ。

敏子 男が千円ぐらいでせこいこというたらいかん。

重蔵 千円ぐらい？

敏子 どーんと入れてこんね。

重蔵 そんげなこというんやったら俺に財布持たせろ。

敏子 九州男児が細かいこというたらいかん。乙姫様に味方してもらわんと。

重蔵 ・。誰か来たらお前ら隠れるよ。ここは敵陣やかいね。

重蔵がまたほっかむりをして土手の向こう側へ。

真弓 大丈夫やろか父ちゃん。泣きそうな顔しちよったよ。

敏子 泣きそうな顔は生まれつき、髪も薄うなって、ますます情けない顔に磨きがかかってきたねえ。ま、久しぶりの故郷やもん、そら複雑よ。

真弓 父ちゃんに喧嘩なんかできるやろか。

敏子 ここまで乗り込んできたとやもん、それなりの覚悟はあるやろ。

真弓 私もお参りしてこよ。

敏子 あんたは行ったらいかん。

真弓 何で？

敏子 男が女連れでお参りしたら乙姫様が焼き餅をやきなると。

真弓 娘よ。

敏子 娘でも何でも、そういう決まり。女連れで漁師がお参りすると、海が荒れ

るちゆう言い伝えがあると。

真弓 迷信やる。

敏子 迷信でも何でも。

真弓 ・・うちの家はどの辺にあつたど？

敏子 港の手前に公園があるやる、あの辺り。空襲で焼けたけどつかい家やつたよ。金丸一家といえは、ここいらじゃ有名やつた。

真弓 子供の頃からじいちゃんによく聞かされた。こんな小さな町の話とは思うちよらんかつた。

敏子 田舎やもん。それでもあつちこつちにぎようさん所場を持つちよつたのよ。

真弓 他人様の土地やる？

敏子 そら露天商やもの、軒下三寸借り受けんと商売にならんやる。

真弓 ・・。

敏子 終戦後、特攻隊の生き残りが愚連隊作って、そいつらにこの町追い出されて。まっこつ悔しかつた。

真弓 何かピンとこんけど。

敏子 何ねあんた、機嫌の悪そうな顔して。

真弓 何でもない。

敏子 あんたもテキ屋の娘なんやから。

真弓 母ちゃんは好きでテキ屋の女房になつたとやろうけど、私は好きで娘に生まれたと違うもの。

敏子 真弓。

真弓 ・・。

自転車に乗った警官有江が現れ、「緊急事態、緊急事態」と言いながら便所へ駆け込んでいく。

敏子 何やるか？

真弓 さあ。

重蔵が慌てて戻ってくる。

重蔵 おい、隠れる、誰か来ると。

敏子 隠れるってどこに？

重蔵 便所。

敏子 便所は今警官が。

重蔵 警官？

と言ってるうちに上原雄太郎と大田川が土手に現れる。

雄太郎 (土手の下を指し) 適当にどつかその辺でいいやる。屋台を組む場所の

草だけ刈つちよてくれ。たいした人出もないやろうけど、よろしく頼むわ。

大田川 はい。(土手の向こう側へ下りていく)

雄太郎 つまらん仕事頼んで悪いな。(重蔵らに気がつき軽く頭を下げる)

敏子 世話役さんでいらっしやいますか？

雄太郎 は？世話役？

敏子 明日の祭りの？

雄太郎 いえいえ、祭りなんて立派なもんじゃありません。

敏子 乙姫様の祭りはあるとでしょ？

雄太郎 あるにはありますけど、どうってことはありませんよ。

敏子 縁日はあるとでしょ？

雄太郎 縁日ってほどのことは。昔は賑やかだったらしいけど今はねえ。

敏子 今はないんですか？

雄太郎 十年前に一度中止になって何にもないのも寂しいって昔を知っちよる年

寄りがいうもんで、露店の真似事を二、三軒。

重蔵 露店の真似事を二、三軒？

雄太郎 うちが油津の商店街でスーパーやつちよるもんで、頼まれて。

敏子 組の方じゃないとですね？

雄太郎 組？何ですか皆さん？

重蔵 ・・二十年前にこの土地に縁のあったもんです。

雄太郎 二十年前？

重蔵 テキ屋です。

雄太郎 ああ、そうですね。じゃあ賑やかやった頃をご存じで？

重蔵 よう知っちよります。

雄太郎 すっかり寂しくなりました。客が集まらんもんですから、露天商の方も
まるで集まらんようになってしもうて。

重蔵 ・・。

雄太郎 あら、もしかしたら、ここで商売をなさるつもりですか？

重蔵 そのつもりで。

雄太郎 どうぞどうぞ、売り上げは期待できませんが、ご自由にどうぞ。

重蔵 そんげ簡単にどうぞぞと言われても。

雄太郎 かまいませんから。

重蔵 テキ屋にはテキ屋の礼儀作法があつとです。ここいらを仕切っておられる
親分にご挨拶申し上げて、筋を通さんと。

雄太郎 仕切つとる人間なんかおりませんから。

重蔵 ・・。

雄太郎 お名前だけ伺っておきましょうか、一応私が任されとりますんで、真似
事の露店ですけど。

重蔵 ・・お控えなすってくださいまし。私生まれは宮崎日南、油津港でござい
ます。姓は金丸、名は重蔵、鯉鮪にまたがって波のしぶきが目に染みる。
通称、泣きの重蔵と申します。

雄太郎 ……。(ぼかんとしている)

便所から有江が出てきている。
土手の上に大田川も。

有江 金丸重蔵？金丸って、まさか・・髪型がえらいこと変わってしもちよるが、
ほんとや、金丸重蔵や。

雄太郎 金丸重蔵。

有江 覚えちよるか？俺よ、わかるか？

敏子 やだ、この人有江さんやが。

重蔵 有江？

有江 そうよ有江孝文よ。テキ屋の。

重蔵 お前有江か。

有江 そうよ、わかるか？懐かしいなあ。あんたは敏子さんか。

敏子 どうも。

重蔵 どうしてお前そんな格好？テキ屋はどうした？

有江 生きとつたら色んなことがあるやろ。

重蔵 ありすぎやろう、テキ屋が警官に？

有江 あんたこそどうして今頃こんなところに？

重蔵 ……。

有江 まさか二十年前の恨みを晴らしに？

重蔵 ……。

雄太郎 大田川、親父に連絡、金丸一家が油津に帰ってきた。急げ。

大田川 は、はい。

大田川が走っていく。

有江 金丸一家を追い出した上原丈太郎の息子で雄太郎よ。

重蔵 丈太郎の息子？

敏子 あんた。

雄太郎 乱暴はいけません、乱暴は。

有江 もめ事はやめちよつてくれよ、今じゃ俺も町を守る警察官やかいね。

雄太郎 僕は親父の商売とは何の関係もないとですから、失礼します。

雄太郎が逃げるように去っていく。

敏子 あんた追いかけていいと？

重蔵 いきなり息子と出くわすとは。

有江 息子の雄太郎は今油津でスーパをやりよる。立派な堅気よ。親父の丈太郎も今じゃすつかり丸くなって、なんもかも息子に任せて楽隠居よ。

敏子 冗談じゃないと、私ら丈太郎にこの町を追い出されたよ。

有江 古い話やが、今更そんなこと。テキ屋の所場もなんも今じゃありませんが。

はあ、あんたら二人やっぱり結婚したんか？

敏子 そんなことどうでもいいでしょ。

有江 そっちは娘さんね？

真弓 ・・。

有江 有江です、昔お父さんには世話になって、元テキ屋です。

真弓 お父ちゃん。

重蔵 ・・。

真弓 浦島太郎やないと？

重蔵 浦島太郎？

真弓 故郷に帰って見たら、なんもかんも変わってしもちよる。

有江 ほう、賢そうなことをいう娘さんやね。

真弓 何かあほらしい。

重蔵 親のやるこつをあほという奴があるか。こっちは命がけで油津に帰ってき
たとやど。

有江 まさか、後で金丸一家の若い衆も乗り込んでくるとやないやろうね？やめ
ちよつてくれよ、喧嘩は。

真弓 若い衆なんかおりません。

有江 おらん？たった三人で乗り込んできたと？

敏子 人数なんか関係ないやろ？

有江 相変わらず敏子さんは勇敢やねえ、男勝りは昔のまんまや。ま、とにかく
せつかく乗り込んできても喧嘩する相手がおらんわ。

重蔵 ・・浦島太郎。

有江 終戦後はこの町にも闇市が出来て、縄張り争いやなんやら賑やかやつた
が、今じゃ平和なもんよ。俺ももう暇で暇で、夫婦喧嘩の仲裁と道案内ぐ
らいしか仕事がないとやもんね。どら、久しぶりの再会やが一杯やるか？

重蔵 勤務中やろが。

有江 いいといいと。

重蔵 お前本当に警官か？

有江 仮装じゃないとよ。ピストルも本物やど。

重蔵 お前のような男が警官になつちよるとは。

有江 時の流れやねえ。

重蔵 ・・。

有江 しかしまた、何で急に、なんかあったとね？

重蔵 ・・親父が死にかけちよる。

有江 金丸の親父さんが？

重蔵 親父ももう七十よ、酒のせいで身体悪くして二年前から寝込んで。

有江 そうね・・。

重蔵 油津の所場をどうしても取り返したいと、近頃うわごとのように繰り返し

て。

有江 それでね。

重蔵 あんまり気は進まんかったとやが、あんまり親父が言うもんやから。

敏子 油津の所場を見せてやりたいもん。

重蔵 この所場には親父の思い出が詰まっちよる。親父だけじゃない、俺もここにおる頃が一番良かった。

有江 はあ。

敏子 青春やったねえ。

有江 じゃあじゃあ青春やった。(重蔵を見つめて) 人間変われば変わるもんや。

重蔵 お互い様やろが。

有江 そうね、金丸の親父さんが・・・。

敏子 あんた、どんげするつもりね？

重蔵 どんげすると言われても。

敏子 お父さんの所場やよ。

有江 正確には人の土地やけどな。

敏子 黙っちよいて。

有江 他人の土地を借り受けて切った張ったの縄張り争い、浮き草家業のテキ屋の辛いところや。

真弓 ・・今更こんなところ取り返してん、じいちゃんが喜ぶとは思われん。

有江 そうやねえ。

真弓 あほらしい。

有江 冷めた娘やねえ。

大田川が田畑を連れて戻ってくる。

大田川 (こわごと) ああ。

重蔵 ・・。

大田川 何人ですか？

重蔵 何人？

大田川 何人いるのか聞いてこいって。

田畑 正直に答えんね。

敏子 百人。

大田川 百人？

敏子 広渡川の河原に金丸一家の若い衆が待たせてあると。

重蔵 おい。

田畑 えらいこつちや。

敏子 丈太郎に伝えちよきなさい、戦争やかいね。

重蔵 敏子。

敏子 金丸重蔵は一步も引かんよ。

大田川と田畑が去っていく。

有江 敏子さん、嘘ついたらいかんわ。

重蔵 敏子。

敏子 びくびくすることないやろ、そのつもりで来たことやから。

重蔵 どこに百人おるとか、三人だけやろが。

敏子 三人じゃ格好がつかんやろ。

重蔵 有江、すぐに行行って、今のは嘘だったと伝えてくれ。

有江 何で俺が？

重蔵 もめ事を未然に防ぐのも警官の仕事やろが。

有江 もめ事が起こってから動くのが警察の仕事。心配いらん、丈太郎は今じゃ

堅気よ、喧嘩しようにも人出がないやろ。

重蔵 じゃあなんで、こっちの人数を聞きに来た？

有江 そらそうやね、昔の仲間を集めるつもりやろか？

重蔵 昔の仲間？

有江 丈太郎の息のかかった昔の仲間を集めたらそれなりの人数になるかもしらんねえ。

重蔵 そらまずい、本気で喧嘩になったらまずい。

敏子 何を言うちよるとねあんた。

有江 あら？喧嘩になったら俺はどっちの味方につけばいいとやろか？

重蔵 なん？

有江 あんたの親父がここを仕切っちゃる頃は金丸一家に世話になったし、丈太郎が仕切るようになってからは、向こうの世話になったし。

重蔵 お前丈太郎にも世話になったとか？

有江 生きちよったらいろんなことがある。こら困ったどっちの味方にか？

重蔵 警官ならどっちにもつかずに、喧嘩をやめさせろ。

有江 ああ、それも一理ある。

重蔵 一理もクソもないやろが。真弓、怪我せんうちに帰ろう。(車に)

敏子 あんた。

重蔵 もたもたしとつたら、喧嘩になる。

敏子 喧嘩しに来たとやろ。

重蔵 負ける喧嘩はせんほうがまし。

敏子 それでも男ね。

重蔵 暴力だけが男の価値やない。

敏子 死ぬまで逃げるつもりね？

重蔵 逃げるっちゃやない、一時退却。知恵をつかわんと。

敏子 この腰抜け。(車の鍵を奪う)

重蔵 おい、車の鍵。

敏子 (便所に駆け込んで出てくる)

重蔵 何をした？

敏子 車の鍵、糞壺に投げ込んだ。

重蔵 敏子。

敏子 一度ぐらい男を見せんね、逃げるために生まれて来たっちゃやないとやる？

重蔵 何を言うか。

敏子 いっぺんぐらい戦う姿を見せてみんね。

重蔵 ・・。

敏子 あんたのお父さんの顔を見ちよったら私怖くなる。真っ青な顔で、所場を取り返したい取り返したいって。

重蔵 ・・。

敏子 あんたの顔にそっくり。

重蔵 親子や。

敏子 死ぬ間際になって、あんたも泣き言いうに決まっちゃる。泣き言いうぐらいたら死ぬ気で戦いなさい。あんたの女房になって良かったと私に思わせなさい。

重蔵 ・・。

敏子 真弓にも強い父親の背中を見せてやりなさい。

重蔵 ・・。(泣きそうな顔になる)

敏子 しつかりせんね、泣きの重蔵。

重蔵 (涙がこぼれそうになる。有江と目が合う)・・・。

有江 見ちよらんかったことにする。人ごとながら我が身のごつ恥ずかしい、女

房に叱責される男。

重蔵 やかましい。

有江 ・・相変わらずやなあ。

敏子 この人、油津を追い出されて、ずっと泣きばいを専門にしちよると。

有江 泣きばい。

敏子 娘と組んで、倒産品の万年筆を買ってくださいと客に泣きついて。

有江 ぴつたりやねえ。

敏子 商売とはいえそんな姿ばかり娘に見せて。

真弓 ・・。

有江 商売なのか、生まれつきなのか。

重蔵 うるさい。

敏子 あんた、負ける喧嘩でもいいやないね、勝負しよう。

重蔵 ・・。

有江 そこまで言われたらやるしかないやろ。俺のピストル貸しちやるか。

重蔵 ふざけんな。(便所へ)

敏子 あんた。

重蔵 糞壺に手を突っ込む度胸はねえ、小便。

重蔵が便所に入る。

敏子　・・。

有江　二十年の間に色んなことがあったやろうね。

敏子　そりゃあるわよ。

有江　そうか、二人は結婚したとか。

敏子　悪いね？

有江　悪くはないけどん、敏子さんやったら、他にも男はおったやろうに。

敏子　ほっちよいて。

有江　（真弓に）あんたのお父さん、どういうわけか昔つから女にはもてたとよ。

油津の七不思議。

真弓　そうですか。

有江　母性本能をくすぐるとやろかね。

敏子　うちの亭主はあんたよりは立派な男、あんたみたいに調子よくあっちにいたりこっちについたりはせん。

有江　そういう風に生きていくしかなかったとやもん。似合うやろ、警官の制服。

敏子　有江さんに警官が務まるんじや、油津もろくなことはないね。

有江　平和な証拠よ。

土手の上に雄太郎が戻ってくる。

雄太郎　あのう、お願いがあるのですが。

敏子　なんね？

雄太郎　このままお引き取り願うわけにはいかんでしようか？

敏子　どうして。

雄太郎　うちの親父ももう年ですし、もめ事は。これは（封筒を出して）些少ですが迷惑料と言うことで。

敏子　私ら、ゆすりたかりと違うとよ。あんた丈太郎の息子なら、事情はわかっるとやろ？

雄太郎　わかっとなりますが、二十年も昔の話を。油津の所場と言われましても、今更、そんなものありませんし、ここで商売されたいなら好きにされてかまいませんし、どうかここはひとつ穩便に。

敏子　あんたの父親には恨みがあると、怖じ気づいたとね？

有江　丈太郎さんはなんて言いますと？

雄太郎　怖じ気づいてじっとしちよってくれればこっちも助かるとですが。金丸一家が戻ってきたという話を聞いたら、腰を痛めて寝込んだのが、急に元気になって。

有江　元気になった？

雄太郎　久しぶりに愚連隊時代の血が騒ぐと言い出して。

有江　あらまあ。

雄太郎　このままじゃややこしいこつに。親父に伝えるんじやなかった。

便所から出てきた重蔵が話を聞いている。

重蔵・・・
有江 臭つ、糞壺に手え突っ込んだな？
敏子 あんた、青ざめちよる場合じゃないとよ、戦が始まるとよ。
重蔵・・・

田畑が走ってくる。

田畑 社長。
雄太郎 どうげした？
田畑 社長のお父さんがこっちに向かっています。
雄太郎 親父が？
田畑 自転車にまたがって、止めたのですが。
雄太郎 自転車？
田畑 日本刀背中に背負って。
有江 ほう、丈太郎さんやる気やね。
重蔵 警官、呑気なこというちよる場合か。

大田川の運転する自転車の荷台に乗って丈太郎がやってくる。

頭に鉢巻き、背中に日本刀、「進め」とかけ声。
ちりんちりと鈴の音、勇ましいが情けない感じ・・・

雄太郎 親父。
丈太郎 上原丈太郎、見参。
重蔵 丈太郎。
丈太郎 よお、金丸か、よう戻ってきた。手下を何百人引き連れてきたか知らんが、この上原丈太郎、逃げも隠れもせん。
敏子 あんたしつかり。
丈太郎 港油津、碇を降ろす、軍艦野郎とは俺のこと。敵をめがけてしぶきを上げて、桜に碇の七つボタン、海軍魂見せてやる。さあ、勝負。(よろけている)

雄太郎 親父。

丈太郎 お前は金丸の親父か？息子か？

重蔵 息子の重蔵。

丈太郎 はあ、げに恐ろしきは時の流れ、ハゲの因縁。親父そつくり。

重蔵 うるさい。

丈太郎 まずは顔見せこれにて御免。喧嘩の支度をしてくる。重蔵、逃げたら承知せんぞ。首を洗うて待っちゃよれ。戦争じゃ。

重蔵・・・

泣き出しそうな重蔵の表情。
久しぶりに動いたのか、苦しそうな丈太郎の表情。
明かりが落ちていく。

二 それから随分時間がたって・・・

すでに日が落ちている。

駐車場に人影はなく波音がかすかに聞こえている。

鼻を手ぬぐいで覆った重蔵が便所から出てくる。車の鍵を探すための木の枝を拾いまた便所の中へ。

銭湯帰りの寺原しのぶが土手を歩いてきて、駐車場へ。

こっそりと車の中を覗いたりしているしのぶ・・・

しのぶの娘、あさみがやはり風呂桶を手に出てくる。

あさみ お母さん、なにしちよるの？

しのぶ なんでもないよ、こんげな時間に車が停まっちゃよるもんやから。

あさみ お風呂で誰か言うちよったね、よそからテキ屋さんが来ちよるって。

しのぶ

・・・

あさみ 明日縁日はあるとやろか？

しのぶ さあ、どんげやろ。

あさみ ・・なんかチャプチャプ音がせん？

しのぶ 波の音やろか・・乙姫さんにお賽銭あげていこか。

あさみ 蚊にさされる。港でサイダー飲んでくる。

しのぶ そうね。

あさみが去っていく。

しのぶが便所の方へ近寄っていく、そこからチャプチャプという音がしているような気がする。突然便所の中から「くそ」という重蔵の声がする。驚いて去っていくしのぶ。すぐにちんぴらのような普段着の有江が焼酎を持って出てくる。

有江 (誰もいないので探す) 重さん、重蔵さん。

便所から重蔵が出てくる。

有江 なにしちよると？

重蔵 車の鍵が見つからん、くそ。

有江 振り回したらいかん。(枝を)

重蔵 (水道で手を洗う)

有江 丈太郎、偉そうなことを言うちよったが出てこんやろ。昔の仲間を集めようとしとるらしいが、見つからんらしい。丈太郎もくたびれちよる。あの身体じゃ一人じゃなんも出来んやろ。

重蔵 こつちが家族三人だけと知ったら、あの男のことや一人でも来るやろ。

有江 今の丈太郎なら喧嘩しても勝てるやろう。

重蔵 ガキみたいなこつ言うな。

有江 まあまあ、久しぶりやが一杯飲もや。

重蔵 なんかそんなちんぴらんごつ格好は。

有江 普段着普段着、勤務とプライベートは別やかいね。

重蔵 まっこつ、お前が警官とは世も末じや。

有江 まっこつ。敏子さんは？

重蔵 娘連れて銭湯に行った、呑気なことよ。

有江 九月とはいえ油津ん夜は汗ばむかいね、そら湯も入りたいやろ。

重蔵 観光に來たわけじゃねえど。

有江 いらいらしたらいかん、ここは油津、のんびり構えんと。き、つもる話もあるやろ、一杯いこう。

重蔵 話なんか無い、お前と一緒にいたら昔からろくなことはない。闇市で商売しよる頃、誰彼構わず喧嘩を売っては自分だけ逃げ出す。借金は踏み倒

す。お前うちの親父から何回破門されたか覚えちよるか？

有江 まあまあ、生きるためやがね。今思い出せば面白え時代やったねえ。

重蔵 ・・。

有江 なんで俺が警官の中途採用に受かったか教えちやろか？

重蔵 いらん・・いや、やっぱ聞きたい。

有江 終戦後、三国人やら愚連隊やら、ここいらも治安が悪うして、俺たちテキ屋が警察の代わりんごつして、働いたやろが。

重蔵 そんげな格好のいいもんと違う。ごろつき同士の喧嘩やった。

有江 そらそうやけんどん、闇市でもめ事があると、警察が何とか騒ぎを収めてくれと金丸の親父に頼みに來たやないね。

重蔵 昔からここいらを縄張りにしちよったかいね。

有江 そんな時に知りおうた警官が、今じゃお偉いさんになつちよって、そんな男に昔悪い遊びを教えたこつがあつて。女やら博打やら。

重蔵 それをネタに脅したつか？

有江 脅したら犯罪やろが、採用してもらえんかったら昔話をしますよと。

重蔵 同じや。物好きなこつよ、警官げな。

有江 昔つから警察と俺たちは持ちつ持たれつやがね。

重蔵 今はそんげなこと無い、ばくち打ちとテキ屋の区別もつかんで、目の敵にしよる。

有江 似たようなもんやないね。

重蔵 違う、俺たちや神農皇帝から脈々とつながるれっきとした商売人やど。大昔神農さんが薬草を露店で人々のために売りさばき。

有江 (遮り) 中国のテキ屋の神様やろ？そんげな人会うたこともない。思い出した、あんたの親父が毎朝商売の前に、神農さんのお札に手を合わせちよったね。

重蔵 それが本物のテキ屋よ、暴力団や愚連隊とは違う。こっちは真面目に商売しよるとになんが道交法違反か。

有江 道路で勝手に商売したらいかんちゅう決まりやもん。

重蔵 警察には腹が立つ。(焼酎を飲んでいる)

有江 だいぶ調子が出てきたね。

重蔵 貸せ。(一升瓶を)

有江 昔とは時代が変わったちゅうこつやね。俺もテキ屋を続けたかったが、ここいらじゃもう商売にならん。旅に出る元気もないし、それで廃業した。日本は今高度経済成長とかいうちよるらしいが、この港町にはなんの関係もなしじゃ。

重蔵 なんが高度経済成長か、俺たちや地べたをはいずり回つちよるだけやが。

有江 まつこつよ。あんた二十年どんげしちよつたとね？

重蔵 油津を出て、延岡の方に移った。そこから商売の出来る場所を探して、九州の北の方をぐるぐる回って。

有江 苦労したとやろね。

重蔵 娘には苦労かけた。(涙ぐむ)

有江 泣かんでも。

重蔵 うるさい。

有江 昔っからすぐ泣くとやから。

重蔵 車に娘を乗せて旅から旅へ・・・

有江 車もだいぶくたびれちよる。どうしてこんげな泣き男が女にもてたとかねえ。

重蔵 ・・。

有江 そういえばあの女、まだ油津におるど。

重蔵 あの女？

有江 寺原しのぶ、一時いい仲やったるうが？

重蔵 寺原しのぶ。

有江 狭い町や、あんたが帰ってきたこともう知られちよるかもね。

重蔵 ・・まずい、そらまずい。

有江 顔色が変わったど。

重蔵 実はそんなこつもあって、油津に戻ってくるとは気が重かった。昔の女の話なんか蒸し返されたら、それが敏子に知られたら殺さるっど。

有江 今更。

寺原しのぶが木の陰から覗いている。

殺気を感じた重蔵がしのぶの方へ振り向く。しのぶがさっと隠れる。

有江 どうした？

重蔵 今なんか妖気を感じた。

有江 妖気？

重蔵 あの女、寺原しのぶは今なにをしちよる？

有江 油津で小料理屋をやりよる。女一人で娘を育てて立派なもんやが。

重蔵 娘？

有江 丁度二十歳ぐらいの娘がおる。

重蔵 二十歳？

有江 どうした？顔色悪いど。

重蔵 ・・。

有江 まさか、あんたの子供やないやろね？

重蔵 馬鹿なこと言うな。

有江 丁度勘定も合うやないね。

重蔵 恐ろしい話はやめちくれ。

有江 心当たりは？

重蔵 心当たり？

有江 子供が出来るような心当たりはあるとやろが？

重蔵 そらあ、ないことはない。

有江 やっぱりか。

またしのぶが木の陰から覗いている。重蔵が見るとしのぶが隠れる。

有江 どんげした？

重蔵 なんか感じる、背筋がぞおつとする。

有江 人は見かけによらんとやうが、どうしてあんたみたいな男に女が寄ってくとやろうかね。

重蔵 うるさい。

有江 まあ、若い頃は今よりは男前やったが。しのぶもあんたの変わり果てた姿を見たら驚くやろうね。恐ろしき二十年。

重蔵 やかましい。二十年前油津を追い出されてしのぶとはあれつきりや、お互いにもう会わんほうがいいやろ。しのぶにはしのぶの生活があるやろうし。

有江 あの女まだ一人もんやど。

重蔵 まこつか。

有江 あんたに捨てられたと思うちよるやろね。

重蔵 俺のせいじゃねえ、あいつは油津を離れたくないというた。丁度その頃、敏子とうまいこつ行き始めて。

有江 もてもてやね。

重蔵 自慢やねえが若い頃に女に不自由したことはない。

有江 今は？

重蔵 色んな意味で不自由しちよる。

有江 (笑う)

重蔵 女房には振り回され、娘には邪険に扱われ。

有江 女の呪いやろ。

重蔵 女は恐ろしいと思い始めたなら、髪の毛も抜けはじめ。枕に抜けた髪の毛がべったり張り付いて、それを見たら恐ろしいやら哀しいやら泣けて泣けて。

有江 一本、二本・・・まっでお岩さんやね。

重蔵 うるさい、余計なこと言わせるな。

有江 自分で言うたくせに。

重蔵 女は怖い。

有江 まっこつ、俺なんかこの年になっても結婚なんかする気にならん、商売女で十分や。

重蔵 それが警察官の台詞か。

有江 素人女に関わると、やがて情が深まりすぎて呪い殺さるっど。

重蔵 脅かすなよ。

田畑がのっそりと出てくる。

田畑 あもう。

重蔵 うわあ。

田畑 うわあ。

重蔵 ああ、たまげた。

田畑 ごめんなさい、びっくりさせて。

重蔵 心臓が止まるかと思うた。

田畑 なんもしちよらんですけど。

有江 あんた上原さんところのスーパーの、なんごつね？

田畑 社長のお父さんが聞いてこいといいなるもんですから。

重蔵 丈太郎が？

田畑 広渡川の河原をなんぶ捜しても、人影もないもんですから。

重蔵 捜したと？

田畑 ほんとに百人も手下を連れてきたとか、確認してこいと言われて。

重蔵 ・・・。

田畑 暗い河原をあっちこっち捜して・・・どんなですか？どんげでしょう？

重蔵 どんげでしょうといわれても。

田畑 正直にいうてくさい、どんげでしょう？

重蔵 気味の悪い女だな・・・。

田畑 そちらが正直に言われんとなら、こつちが正直に言うてもいいでしょうか？

重蔵 ・・・。

田畑 どう見てん、百人も子分のおる親分さんには見えんとですけど。

重蔵 ほつといてくれ。

大田川が駆け込んでくる。

大田川 なにしちよると？

田畑 宏君に怪我をさせたくない、私が聞きに来た。

大田川 女だてらに、そんなこと。

田畑 宏君は血の気が多いとやから私に任せちよいて。

大田川 そんなわけにいくか、男がすたるど。

田畑 宏君。

大田川 女はすつこんじよけ。

田畑 宏君に怪我をさせたくない。

大田川 宏君。

有江 お前から突然、なんのショータイムか？田舎芝居が始まったど。

大田川 正直にいうてください、子分がおるのかおらんのか。

重蔵 ・・。

有江 ほんとのことをいうた方がいい、嘘をついたら余計ややこしいこつになつど。

田畑 今嘘と言いましたね？

有江 え？あ。

田畑 やっぱり誰もおらんとですな。

有江 しもた、いうてしもた。

重蔵 有江。

田畑 連絡。

大田川 おお。

田畑と大田川去っていく。

有江 あらら。

重蔵 なにがあららか？

有江 ま、そのうちにばれるこつちや、遅いか早いかそっだけ。

重蔵 丈太郎が手下連れて乗り込んだきたらどうする？

有江 心配いらんて、そんなたいしたこつにはならんやろ。

重蔵 呑気なこついうな。

有江 いざとなつたら警察に連絡しろ。

重蔵 警察はお前やろが。

有江 じゃあじゃあ忘れちよつた。

重蔵 まっこつ。

有江 心配いらんて。

重蔵 ・・。

有江 どちら、小便してこよ。

有江が便所へ。

重蔵 まっこつろくなこつにならん。

しのぶが出てくる。

しのぶ ……。

重蔵 ……出た。

しのぶ わかりますか？

重蔵 し、し、しのぶ。

しのぶ お元気そうで何よりです。

重蔵 はい…まずいまずい。

しのぶ まさかまた油津で重蔵さんに会えるとは。

重蔵 ああ、いや、まずい。

しのぶ 夢のごつある。

重蔵 げ、元気か？

しのぶ 女一人で生きる二十年は長かった。私今でも後悔しちよる、重蔵さんと二人で乙姫様にお参りしたこと。あれから私たちおかしなこつに。

重蔵 ……まずい。

しのぶ これお店の名刺。(渡す)

真弓が戻ってくる。

重蔵 あ。(慌てて車の中へ逃げ込む)

しのぶ ……。

真弓 (しのぶに気がつく)

敏子が帰ってくる。しのぶが去っていく。

敏子はしのぶの背中ぐらいを見る…。

敏子 誰？

しのぶ さあ。

便所から有江が出てくる。

有江 おお、敏子さん、いいねえ石けんの香り。

敏子 うちの人は？

真弓 車の中。

有江 怖じ気づいたか。敏子さん実はばれてしもた。

敏子 なにが？

有江 こつちに加勢がおらんのが丈太郎にばれた。

敏子 そうね・・・(車のドアを開けて)車の中で震えちよる場合じゃないやろ。

重蔵 誰が震えちよるか。

敏子 私は身も清めてきた、覚悟は出来ちよる。

重蔵 大げさなこと言うな。

敏子 あんたみつともない真似だけはせんじよてね。

重蔵 わかつちよる。(真弓に目配せする)

敏子 なんね？

重蔵 俺も男よ、やる時はやる。

有江 おお。

真弓 なにをやりなるとやろ？

重蔵 ・・・

敏子 さつき、お父さんの病院に電話した。

重蔵 親父が出たとか？

敏子 (頷いて) いい知らせがあるまでは、死ぬわけにはいかんと言うちよんなった。

重蔵 そうか・・・

敏子 真弓、乙姫様に手を合わせてこよ。

重蔵 おお、行ってこい、行ってこい。

敏子と真弓が乙姫様へ。

こつそりと真弓に手を合わせている重蔵。

有江 どうした？

重蔵 出た。

有江 なにが？

重蔵 寺原しのぶ。

有江 やっぱ出たか。

重蔵 どうしよう？

有江 色々と大変やねえ。

重蔵 八方塞がりや。やっぱ帰ってくるんじゃなかった。

きつちりとした背広姿の小玉仙一が出てくる。

小玉 そこにおるとは金丸重蔵さんか？

重蔵 誰？

小玉 久しぶりやなあ。俺やが小玉仙一。

重蔵 小玉？

有江 丈太郎の右腕、愚連隊の特攻隊長やがね。

小玉 忘れたか俺の顔？

重蔵 忘れるもんか、あんたに何発も殴られた。

小玉 丈太郎の大將から電話があつて、久しぶりの出入りやからどうしても顔を
出せと言われて。昔は世話になつたから断るに断れんかった。

重蔵 暴力はやめてくれ、暴力は。

小玉 心配するな、殴りはせんが。昔はよう暴れたが、もうすっかり落ち着いた。
訳あつてもうもめ事はいかん、俺も立場があるから。

重蔵 立場？

有江 小玉さん、今度の市議会議員選挙に立候補しなるげなな。

重蔵 選挙？

小玉 こんげな時に暴力沙汰は致命傷やかいね。小さい町やが、すぐに噂が広ま
つて票が減る。

重蔵 あんたが市議会議員？

小玉 (名刺を渡す)

重蔵 小玉建設代表取締役社長。

小玉 テキ屋をやめて建設会社を作つたとよ。ここいらで生きていくためには公
共事業頼みやかいね。議員になつちよつた方が何かと。有江君、是非一票
頼むど。今度支持者のじいさんばあさん集めて指宿に温泉旅行に行くかい、
あんたも是非一緒に。

有江 ああ、指宿ですか、いいですなあ。

重蔵 (あきれている)

敏子と真弓が戻ってくる。

敏子 誰かと思えば小玉仙一。

小玉 あらあ、こらたまげた、あんた敏子さんか？

敏子 どんだけあんたにひどい目にあつたか。

小玉 あんた住民票はどこね？是非今度の選挙に。

敏子 選挙？

有江 来年は市議会議員さんやど。

敏子 (小玉に突つかかっていく) なに寝ぼけたこというちよると。

小玉 いかんいかん、暴力はいかん。

敏子 そらこつちの台詞やる。この馬鹿たれ。

敏子と小玉が激しくもみ合う。有江と重蔵が止める。

小玉 相変わらずやね敏子さん。見事なもんや女にしとくのはもつたいない。

敏子 うるさい。あんた何とかせんね。

小玉 あら、もしかして二人は夫婦ね？

敏子 夫婦で悪いとね？

小玉 こらシヨックやねえ、そうね、結婚したとね。

敏子 あんたこの男を殴りなさい。

有江 敏子さん落ち着きなれんか。

小玉 まっこつじや、落ち着こう、とりあえず落ち着こう。そっちは二人の娘さんね？

真弓 ・・。

小玉 子連れで喧嘩はいかんわ、いい年した大人やないね。

敏子 あんたに言われたくない。

有江 敏子さん。

小玉 もうすぐ丈太郎の大将も来るやろうけど、何しろもめ事はいかん。とりあえず俺が丸いこと納めるから、悪いようにはせんから俺に任せちよいてくれ。

有江 どんげしなるつもりですか？

小玉 大将のことやかい、喧嘩すると言い出したら中々後には引かんやろ。金丸さんも向こうが引かんと言えば、納めどころが無くなるやろう。

敏子 当たり前やないね。

小玉 金丸一家を油津から追いだしたことについては、俺が謝る。

敏子 謝って済む問題じゃないやろ。

小玉 謝って済まん問題かもしれんが、俺が頭を下げれば丈太郎の大将も、折れ

てくれるやろう。

有江 小玉さんは清水一家で言えば大政小政の役どころやもんな。

小玉 何しろもめ事はいかん。落ち着いてお互い話をせんと。

重蔵 丈太郎が落ち着いて話をするとは思われん。

小玉 そら多少はもめるやろうけんどん、そらまあ芝居のつもりで。

重蔵 芝居？

小玉 頃合いを見て俺が土下座をして謝る。

有江 土下座？

小玉 たいしたことやない、これから選挙に出るとやから。俺が頭を下げればきつと大将も納めてくれる。

有江 ここは小玉さんに任せたらどんげね？

重蔵 俺はいいけんどん。

敏子 あんた。

小玉 元々金丸一家の所場やったところは返して貰うこつ話もしてみるから。

有江 さすが小玉さん、有権者がほつとかんわ。

重蔵 喧嘩せずに話がつくとやったらそれにこしたことは。

敏子 芝居で土下座されてん、気持ち収まらん。

小玉 心を込めて頭を下げる、芝居でんなんでん、一人前の男の頭よ。そんげ安いもんじゃないど。

敏子 ・・。

有江 後は丈太郎さんの出方次第やね。何しろ随分調子が出ちよるみたいやから。

小玉 多少は血も流れるかしらんね。

重蔵・・・

丈太郎、田畑、大田川出てくる。

丈太郎 待たせたな。

重蔵 丈太郎。

丈太郎 たった三人でよう逃げ出さんかったな。

敏子 そつちこそよう出てきたね。

小玉 お待ちしちよりました。

丈太郎 おお、小玉か。

小玉 はい。

丈太郎 よう来てくれた、加勢はお前だけやが。

小玉 はい。

丈太郎 俺の一票くれてやる。

小玉 ありがとうございます。

丈太郎 俺のことが憎いやろうね。

敏子 当たり前、あんた。

重蔵・・・

丈太郎 大事な所場を取られたとやもんね。

重蔵 所場はテキ屋の命やど。

丈太郎 命を取られてよう二十年も生きちよったな。

重蔵 うるさい。

丈太郎 そんげ大事なもんなんやんで逃げ出した？

重蔵 うるさい、だからこうして帰ってきた。

丈太郎 まともに喧嘩も出来んくせに。

重蔵 なにを。

丈太郎 腹が立つとやったらこの顔殴ってみらんか。

重蔵・・・

丈太郎 取られた命を取り返すとやろうが。

敏子 あんた。

重蔵 くそ。(丈太郎の胸ぐらをつかんでこぶしを振り上げるが・・・)

敏子 あんた。

重蔵 (殴れない)

小玉 よおし、そこまで。

小玉が土下座をしようとするが、先に丈太郎が土下座をする。

小玉 え？大将？

重蔵　・・・

丈太郎　すまん、許してくれ。

重蔵　は？

丈太郎　よう考えたら喧嘩をする理由が見つからん。

重蔵　・・・

丈太郎　金丸一家が所場を取り返しに来た。じゃけんどん、肝心の所場は、もう

なんの値打ちもない。

重蔵　・・・

丈太郎　金丸一家の命の所場を俺は台無しにしてしもうた。二十年の間に俺もぼ

けてしもた。

重蔵　丈太郎さん。

丈太郎　こんげな頭下げたところでなんの役にもたたんかも知らんが、すまん、

申し訳ない。

重蔵　・・・

頭を下げ続ける丈太郎。

あつけにとられてそれを見ている重蔵ら・・・

明かりが落ちていく。

三　さらに夜は更けて

車の回りに箱などを並べ、丈太郎、有江、小玉、敏子、田畑、大田川、宴会をしている。辺りは真つ暗だがそこだけ露店用の裸電球で明るく照らされている。

重蔵は一人離れて元社務所であった小屋に腰掛け、ちびちびと飲んでる。真弓は車の中で寝ている。

丈太郎を中心に皆かなり酔っぱらって歌っている。

「テキ屋殺すにや刃物はいらぬ、雨の三日も降ればよい、ヨイヨイ」

有江　お見事。

敏子　いやあ、丈太郎さんがこんげ話のわかる人とは思わなかった。

丈太郎　なんのなんの、まっこつ今日は懐かしい、さあ、飲むど。

敏子　（重蔵に）あんた、そんなところでぼんやりしちよらんで、こっちにこんね。

重蔵　・・・（動かない）

小玉　世の中は大きゅう変わった、昔のことは水に流して未来を語らんと。

有江　その通り。

小玉 まさかこんげして、敏子さんに酌をしてもらえる日が来るとは思うちよらんかったね。

丈太郎 小玉は敏子さんに惚れちよつたろうが？

小玉 ひとつつも相手にしてもらわれなかった。

有江 懐かしき青春の日々やねえ。

敏子 (田畑、大田川に) さ、あんたらも気をつかわんで飲みなさい。

丈太郎 こいつらは元々、テキ屋になりたいちゆうて俺んところを頼つてきたとよ。

敏子 へえ、そうね。

大田川 子供んころの縁日が忘れられんかったもんで。

丈太郎 じゃけんどん、そんなころにはもうここいらのタカマチはどこも下火で、

商売にはならん、結局こいつら、息子の始めたスーパ一の店員よ。

小玉 時代の流れよ。

丈太郎 何とかもり立てて行きたかったとやが。

有江 二人は恋人同士か？

大田川 まさか、違います。

田畑 そんげ激しく否定せんでも。

有江 女を泣かすと呪わるつど。

大田川 関係ないですもん。

田畑 すかんもう。

丈太郎 甘えた声出すな、気色悪い。

敏子 東京やら大阪には行こうと思わんかったとね？

大田川 学校もろくに出ちよらんし、行つてなにしていいかわらんし。

田畑 私は都会にも憧れたけんどん、宏君がこつちにおるし。

大田川 行けば良かったとに。

小玉 こんげな田舎でくすぶつちよつたら、カビがはゆつど。

有江 油津の発展に小玉先生に頑張つてもらわんと。

小玉 頼むど一票。

敏子 夜店で商売しよるテキ屋が、格好良く見えたもんやつたねえ。

丈太郎 おう、女にやもてたねえ。

有江 今は電球のたまやが、昔はカーバイトよな。

丈太郎 暗闇に露店がぼうつと浮かび上がつて、何ともいえんとよね。乙姫様ん
タカマチだけでも百軒近く露店がでちよつて。

敏子 昼間見るとくだらん男も、映画スターんごつ見えて。

小玉 あんたそれで重蔵に惚れたとね？

敏子 昼間は会うてもらえんかった。

小玉 重蔵の作戦勝ちやね。(笑う)

重蔵 …。(立ち上がる)

丈太郎 おい、こつち来て飲まんか。

重蔵 …小便。

重蔵が便所へ。

丈太郎 ・・明日はなんの店を出すとか？

大田川 風船と、金魚と、お好み焼きです。

丈太郎 そっだけか？

大田川 はい。形だけ、真似事ですから。

丈太郎 寂しいもんやねえ。

敏子 あんたなんか口上出来ると？

大田川 口上？

敏子 テキ屋の口上、テキ屋になりたかったとやろ？

大田川 油津の鰹節なら。

小玉 おお、やってみろ。

大田川 ・・では・・さあさあ、寄ってみらんね、さわってみんね、ずらり並んだ、鰹のミイラ、右手左手合わせて叩きや、鰹鰹と音がするど。右の鰹が日向灘、左は遠く玄界灘、離ればなれの悲しき恋人、ミイラとなって結ばれた。

田畑 はあ、シヤカシヤカシヤカシヤカ。

敏子 なんねそれ？

田畑 合いの手です、鰹節を削る音。

敏子 お世辞にもうまいとはいえんねえ。

大田川 愛し恋しは、皆同じ、人も魚も皆同じ・・ええと。

小玉 さあ、どうした。

大田川 ええと・・。

便所から重蔵続きを言いながら出てくる。

重蔵 愛し恋しは、皆同じ、人も魚も皆同じ、愛の結晶削ってみれば、味噌汁煮物茶碗蒸し、父ちゃんにつこり、子供はぶつくり、母ちゃんお鼻が高くなる。

敏子・田畑 はあ、シヤカシヤカシヤカシヤカ。

重蔵 さあさあ、出汁がうまけりや家庭は円満、出汁がいらなきや拍子木にも使えるど、買うてくください鰹節、我が身削って味を出す、身持ちの堅さが自慢です、栄養満点試験は零点、頭は悪いが味は良い、港油津本場の鰹、ほら持つてけ、鰹のミイラ。

大田川 おお（立ち上がって拍手）勉強になりました。

敏子 普段は駄目男やけんどん、こういう姿を見せらるっとほだされる。

重蔵 ・・。（また社務所の方へ）

丈太郎 見事なもんや、さすがは金丸一家。（一升瓶を持って重蔵のところへ）一献どうね。（焼酎を注ぐ）

重蔵　・・。

丈太郎　（田畑に）おい、焼酎が足りんど。

有江　もう酒屋は閉まつちよるやろう。

丈太郎　そこいらの飲み屋からツケでもろてこい。

有江　おお、つまみも。

田畑　行つてきます。

田畑が走っていく。

重蔵と丈太郎の様子を皆気にしている。

丈太郎　（重蔵に）金丸一家は本物のテキ屋よ、それを俺たちが追い出した。生

きていくのに必死やったとはいえ、すまんことをした。

重蔵　今更。

丈太郎　この丈太郎が頭を下げるとやから話を聞け。

重蔵　・・。

丈太郎　お互い頭が薄うなった。

有江　人様々の薄まりかたやねえ。

丈太郎　やかまし。

有江　すんません。

丈太郎　戦争で、親兄弟も死んで家も焼けて、仲間も仰山死んだ。お国のためと

みんな死んだとに、そのお国がらつと変わつてしもうた。どんげしてい

いかわからんかった。

重蔵　誰でんそうじゃ。

丈太郎　知覧の基地から引き揚げる途中、こん油津に流れ着いて、今考えれば自

棄糞のように暴れて。

小玉　そういう時代やった。みんなが時代にもてあそばれた。

丈太郎　あんたらには嫌な思いをさせたが、こつちも必死で頑張った。ま、そん

げなこつちはこつちの勝手な理屈やろうけんどん。

重蔵　（酒を飲み干す）

丈太郎　俺は大分の生まれやが、いまじゃこん油津が自分の故郷やと思うちよる。

二十年ここにおって、潮の匂いをかいじよつたら、喧嘩も争いも馬鹿らし

ゆうなった。見事に日向ぼけよ。

重蔵　油津は俺の故郷や。

丈太郎　（頷いて）明日この所場をあんたが仕切つてくれ。

重蔵　・・。

丈太郎　金丸一家の看板で乙姫様のタカマチを。あんたの親父さんにもそれを見

せてやってくれ。所場をお返ししますと金丸の親父さん宛に一筆書いちよ

くかい。

重蔵　今更こんげな所場。

丈太郎　有江、お前明日警察休め。

有江 は？

丈太郎 ここで店を出せ、景気づけやが。

有江 きゆうにそんげなこつ。

丈太郎 お前がおらんでも警察は関係ねえやろ。小玉、お前も。

小玉 いやいやそれは。

丈太郎 がたがた言うな、昔の活気には追いつかんやろうが、お前ら協力しろ。

敏子 あんた、丈太郎さんがせっかくいうてくださるとやから。丸く収めんね。

重蔵 お前が俺の尻を叩いてここに連れてきたとやろが。

敏子 返してもらえばそれですむやないね。

重蔵 勝手なこついうな。ふるさとは遠きにありて思うもの・・まっこつじや、

何しに帰ってきたとか俺はわからんごつなつた。

敏子 一筆書いて貰えば、お父さんも喜びなるやろうに。

重蔵 こんげなところ返してもろうて何になるか。

敏子 あんた。

重蔵 ・・俺が喧嘩の出来る男なら良かった・・負けてんいいかい、喧嘩の出来

る男なら良かった。(泣く)

敏子 みつともないよ。

重蔵 みつともないのはよう知つちよる。

車から真弓が降りてくる。

真弓が水道の蛇口をひねり顔を洗う。

敏子 起きたと？

真弓 寝ちよられるわけないやろ。

重蔵 ・・。

真弓 (突然一升瓶をつかみラップ飲みする)

敏子 真弓。

有江 やめんね。

真弓 父ちゃんが喧嘩が出来んなら私がする。(丈太郎につかみかかり殴りつける)

小玉 おいおい。

敏子 真弓。

皆で引き離す。

丈太郎 こらたまがった。

真弓 私は子供ん頃からずっと父ちゃんと一緒。父ちゃんの会社が倒産しました、万年筆買うてくさいと頭を下げて、その隣で父ちゃんはおんおん泣きよる。泣いちよる顔ばかり見せられて、どんげすればいいとかわからん。

敏子 商売やがね。

丈太郎 俺のせいや、おじさんのせいでお父ちゃんはそんげな仕事を、すまん。

真弓 気楽に謝らんじよつてください。今頃謝るとは卑怯。

丈太郎 まっこつ。

真弓 色んな町、車に揺られて行ったり来たり、もううんざり。

敏子 真弓。

真弓 ・・。(行くこうとする)

敏子 どこ行くと？

真弓 海。

敏子 真弓。

真弓が土手に上がって去っていく。

敏子がそれを追う。重蔵も後を追うが、立ち止まる。

重蔵 ・・。

小玉 年頃の娘がおると大変や、うちも同じ。

丈太郎 おい、飲み直そうや。空気の入れ換えじゃ。

有江 じゃあじゃあ。

丈太郎 俺も息子に随分突っつかれた、もう時代が違うげな。

重蔵 ・・よし、飲むど。

有江 おお、飲む飲む。

小玉 俺も娘にはいじめられる。選挙とかみっともないから止めちよつてと泣き

つかれた。

丈太郎 そら娘が正しい、まっこつみっともない。

有江 じゃあじゃあ。

小玉 田舎の建設業者が生きていくためには、政治と絡まんと。

丈太郎 愚連隊上がりが何を言うか。

重蔵 がっかりする、帰ってきてみれば楽隠居に、警官に、市議員、なんのこ
つかわからん。

有江 神農皇帝の正しき弟子はあんただけやね。

重蔵 娘に馬鹿にされるだけよ。

田畑 神農皇帝ってなんですか？

丈太郎 大昔の中国におった神様よ。正確には農業の神様らしいが、このお方が
薬草を露店で売ったとが、テキ屋の始まりよ。テキ屋はこの神農皇帝を神
様とあがめちよる。俺も勉強しちよるやろが。

田畑 どんげな口上やつたとでしょう？

丈太郎 そんげなこと知るか。中国の神様やかい中国語やろ。

田畑 その神様も車に乗って旅をしたとでしょうか？

丈太郎 さあ、どんげやろ？

小玉 車なんかあるわけないでしょ。

丈太郎 リヤカーぐらいあるやろ。

有江 リヤカーって、何千年も昔の話やろ。

小玉 神様がリヤカーはねえやろ。

丈太郎 リヤカーぐらいあるやろ、中国語でなんというかねリヤカー？

有江 知りませんよ。

田畑 私懂れます、色んなところ旅をして、商売をして。

重蔵 俺を励ましちよるつもりね。

田畑 いいえ。

重蔵 そんな楽なもんやないと。夏は暑いし、冬は寒いし、雨もあれば風も吹く。

田畑 はあ。

重蔵 あんまり人には勧められん。

田畑 そうですか。

重蔵 確かに気楽は気楽やが、気がついたらなんにも無いかも知らん。

丈太郎 お前らスーパーの店員で良かったかも知らん。

田畑 ・・。

丈太郎 月々きちんきちんと決まった金が貰えるとやもんねえ。

有江 しかし不思議なもんや、この顔ぶれでこうやって酒を飲むとは思うちよらんかったねえ。

丈太郎 色々あったが水に流してこれからは付き合ってくれ。

重蔵 ・・。(返事に躊躇している)

大田川がしのぶを連れて戻ってくる。

大田川 酒持ってきました。

小玉 ご苦労さん。おお、あんたしのぶの女将。

重蔵 (ギョツと)

大田川 つまみを運んできてもらいました。

しのぶ たいしたもんはないとですが。

丈太郎 そらすまん、あんたもこっちに来て一緒に飲もうや。たまにはこうして飲むのもいいもんやぞ。

小玉 昔はこんげして、よう屋根のないところで飲んだもんや。

しのぶ お邪魔じゃないですか？

丈太郎 何が邪魔なことがあるもんね、あんたのような別嬪さんは大歓迎やが。

小玉 ささ、どうぞ。

丈太郎 おお、飲肥天に漬物ね。

しのぶ あり合わせで。

丈太郎 おお、紹介せんといかんね、油津の小料理屋のおかみでしのぶ。

しのぶ どうも。

丈太郎 こっちは昔ん油津のテキ屋で、あ、もしかしたら知っちよるか？

重蔵 いやいやいや。

丈太郎 金丸重蔵さん。

しのぶ どうも。

重蔵 ど、ど、どうも。

しのぶ お近づきに一杯。

重蔵 こらどうも。(手が震える)

丈太郎 おお、別嬪には相変わらず弱いごつあるね。

小玉 ささ、乾杯じゃ乾杯。

丈太郎 油津の夜に。

しのぶ 素敵な皆さんに。

丈太郎 乾杯。

しのぶ (飲んで) あらまっこつ、外で飲むと美味しいごつある。

丈太郎 まっこつよ、昔を思い出して大いに飲んじよるところやった。

有江 しのぶさん、店大丈夫な？

しのぶ お客さんがちょうど途切れたところやったから、娘が店番しちよつてくれるし。

小玉 この人こう見えてん娘さんがおるとよ。

重蔵 へえ、そうですか。

丈太郎 立派な娘よ、俺の娘にしたいぐらいよ。

小玉 大将、冗談になつちよらんど。

丈太郎 俺の女房が十年前に死んで、何とか後添えに来てもらえんもんやろかい
と思うちよるとやが、まっで相手にしてくれん。

重蔵 へえ。

しのぶ また丈太郎さん、飲むとそんげな冗談ばかり。

丈太郎 冗談やないど。

小玉 冗談やないからしのぶさんも困つちよる。

丈太郎 困りやせんやろ、こんげなよかにせが口説いちよるとやかい。ささ、ぐ
つといかんね。

しのぶ よかにせどんが私を酔わせて何しなる気やろ。

丈太郎 おお、色っぽいどお、ささ、飲まんね飲まんね。

有江 こらえれこつちや火がついたど。

丈太郎 おい有江、景気づけやが、余興に拳銃でも発射せんか。

有江 何を言うちよるとですか。

丈太郎 (笑う)

小玉 こら長なっど。

しのぶ 金丸さんは乙姫様の縁日に来なつたどですか？

重蔵 ・・・そうです。

しのぶ いつまでこつちに？

重蔵 ・・。

丈太郎 祭りが終わつたら帰る、さつと帰る、な。

重蔵 ・・。

しのぶ 元々はこつちにおんなつたどですか？

重蔵 油津の人間です。

丈太郎 おいおい、何か話が堅いど、会話は弾むようにせんと。

しのぶ 何年前に油津に？

重蔵 二十年前まで。

しのぶ その頃は油津も空襲で焼けて、何もなかった頃ですね。

重蔵 はい。

しのぶ どんげです、久しぶりの油津は？

重蔵 変わったような変わらんような、盛り上がったような盛り下がったような。

丈太郎 どっちかわからん。

しのぶ 波の音と港の匂いは変わらんでしょう？

重蔵 まっこつ。

しのぶ ずつとこつちにおんなればいいのに。

重蔵 ・・。

しのぶ 旅から旅がお好きですか？

重蔵 好きなような嫌いなような。

丈太郎 おい、ちよこつと二人だけで会話しすぎやないとか。

しのぶ お客さんは大切にせんと。

丈太郎 そらそうじゃ。(笑う)

小玉 女将、こん男に惚れてん女房がおるかい駄目やど、これが怖い女やど。

しのぶ へえ、奥さんがおんなるとですか。

重蔵 おります、一人。

丈太郎 そら一人やろ。

小玉 娘も一人。

しのぶ へえ・・私にも二十歳になる娘が一人。

重蔵 (酒を注いで飲み干し、むせる)

有江 どんげした？

重蔵 ちよこつと寒気が。

有江 夏風邪か？

しのぶ 卯酒でも作ってきましようか？そういえば昔、卯酒の好きな男の人がおんなった。

丈太郎 おいおい、聞き捨てならん話やど。

小玉 まさかそん男が娘の父親ね。

しのぶ さあ。

丈太郎 そんげな話はいっぺんも聞かせてくれたこつがないねえ。

しのぶ 聞いたら丈太郎さんしらせなるでしょ？

丈太郎 うん、どつとしらせる。

しのぶ 金丸さん、こつちにおんなる間に店にも顔出してくださいね。

丈太郎 おいおいサービスしすぎやど。女将はこういうタイプが好みか？

しのぶ 何か淋しそうな顔をしちよんなるもんやから。

丈太郎 淋しいとは頭やろ。

しのぶ 大丈夫ですか？

重蔵 大丈夫。

しのぶ じゃあもう一杯。

丈太郎 おい、あんまり近寄ったら妊娠すつど。(有江を輪の外に連れ出し)おい、あん二人なんかおかしくねえか？

有江 さあ。

しのぶ 立派な奥様がおんなるとでしょうね。

重蔵 立派なような立派なじゃないような・・・。

敏子と真弓が戻ってくる。

敏子 ほら、何とか言わんね。

真弓 ・・おやすみなさい。(ぶすつとしたまま車の中へ)

敏子 すいません、まともに挨拶もできんで。

重蔵 さあ、そろそろお開きに。

丈太郎 おいおい、これからやど。

重蔵 明日もあることやから。

有江 じゃあじゃあ明日もあるこつちや。

重蔵 パアツと片付けてさあつと帰りましょうか、皆さん。

丈太郎 どうした急に？

重蔵 娘も寝ると言いよるし。敏子お前もはよ寝ろ、明日があるぞ。

敏子 何ねあんた。

しのぶ 金丸さんの奥様ですか？

敏子 はい、そうですけど、どなた？

しのぶ しのぶと言います。

重蔵 近所の飲み屋の女将さんげな。

有江 酒とつまみを持ってきてくんだったと。

重蔵 さあ、お開きお開き。

しのぶ お世話になりました。

敏子 何のお世話を？

重蔵 こちらこそどうも、さ、敏子寝るぞ。

敏子 ・・。

あさみがやってくる。

小玉 おお、あさみちゃんか。

あさみ お母さん、お店にお客さん。

しのぶ そうね。うちの娘です。

重蔵 ・・娘さん。

あさみ こんばんは。

重蔵 ・・。

しのぶ よかつたら皆さん、うちの店で飲み直しませんか？

丈太郎 おお、そらいいね。まだ飲み足らんが。

小玉 どうか重蔵。

重蔵 いやいや俺はこれで。

しのぶ ささ、そしたら丈太郎さん、行きましょう。(腕につかまり)

丈太郎 行こう行こう、よか夜じゃ。

小玉 また明日、奥さん世話になりました。

敏子 いいえ。

丈太郎 有江お前もこい。

有江 あ、俺も、はいはい。

丈太郎 明日は昔を思い出して盛大にやるかいね。

しのぶ ほしたら。

敏子 お休みなさい。

しのぶ、丈太郎、小玉、有江、去っていく。

あさみがもう一度重蔵に頭を下げて去っていく。

重蔵 ・・。

敏子 今の女の人、どっかで見たとような気が。

重蔵 気のせいやろ、飲み屋の女将なんてみんな同じような顔しちよる。

敏子 どうしたとあんた汗一杯かいて。

重蔵 体質、生まれつき。

敏子 かきすぎやが。

重蔵 敏子、お前調子が良すぎるぞ。

敏子 何がね？

重蔵 何が丈太郎さん丈太郎さんか、あれは敵やろが。

敏子 いいやないね、所場を返すといいなるとやから。

重蔵 それだけの問題じゃねえやろが。

敏子 お父さんもきつと喜びなる。

重蔵 女はじゃかい好かんとよ、目先の損得でころころ態度が変わる。

敏子 喧嘩する度胸もないくせに偉そうなこと言わんじよって。男がだらしないから女が頑張って場を仕切よると。なーんの役にも立たんところが九州男児。

重蔵 ・・まっこつ。

田畑 片付けましょうか？

重蔵 いや、いい、いい。

大田川 じゃあこれで。

重蔵 いやいや(二人きりになりたくなく)もう少し飲もう、もう少し。

大田川 いいとですか？

重蔵 焼酎が残っちよる、もったいない。

田畑 じゃあ、いらん箱だけ車に。

重蔵 ああ、すまん。

田畑と大田川片付けをはじめ。
重蔵が敏子に酒を一杯ついでやる。

敏子 ・・丈太郎も歳を取ったね。

重蔵 お互い様よ。

敏子 ・・どんげする？明日お父さんこっちに連れてくる？

重蔵 そんな体力は残っちゃらんやる。

敏子 そうやね。

重蔵 丈太郎に一筆書いてもろて、ここで商売をしちよる写真でも見せてやればそれで安心するやる。

敏子 ・・うん。

重蔵 こんげなことに何の意味があるとかわからんごつなつた。

敏子 そうやね。

重蔵 二十年は長すぎた。

敏子 まっこつ。

重蔵 あつという間のように思うちよつたが。あつという間も意外と長い。

敏子 ・・。

田畑 (女物のハンカチを拾い) これ、しのぶさんのやるか？

重蔵 ・・後で届けてやればいいやる。

大田川 (車に荷物を・・) これ、ギターですか？

重蔵 ああ。

大田川 弾きなるとですか？

重蔵 弾きなるといふほどのことはねえけんどん。油津を出て、こいつと二人、博多で少し流しの修行をしちよつたことがあるもんやかい。

大田川 流しですか。

重蔵 あれも、テキ屋の仲間やかいね。知り合いに頼んで教えてもうろうたが結局ものにはならんかった。今じゃ旅の途中の手慰みよ。

大田川 へえ。

敏子 この人こう見えて意外とハイカラやとよ。

田畑 どんな曲を弾きなるとですか？

重蔵 何でも、古い曲から新しいもんまで、軍歌演歌歌謡曲、GSまで。

大田川 GS。

田畑 ガソリンスタンド。

重蔵 近頃髪の長い男の歌手がキヤアキヤア言われながら歌うちよるやるが。

田畑 グループサウンズですか、意外やなあ。

大田川 一曲お願いします。

重蔵 いやいや。

敏子 出し惜しみするようなんじゃないやる。

重蔵 じゃあ一曲。新しいのと古いのとどっちがいいね？
田畑 新しい方をお願いします。
重蔵 それやったらタイガース。
大田川・田畑 (拍手)

「モナリザの微笑」

※「モナリザの微笑」 1番の歌詞、2回目の「雨がしとしと日曜日」を歌った後

テキ屋困るよ

露天は晴れなきやお手上げだ

どんなに遠く旅していても

テキ屋は屋根と釣り銭欲しい

金魚綿飴カルメ焼き七味お好み

焼きイカ焼きそばリンゴ飴

いつの間にかあさみが重蔵の歌を聴いている。

重蔵 あ。

あさみ 変な替え歌止めてください。私タイガースのファンなんです。

重蔵 ごめんなさい。

あさみ 母が忘れ物を。

田畑 ああ、これ。

あさみ すいません。

大田川 誰のファンね？

あさみ 岸部シロー。

田畑 へえ、変わっちよるね。新しく入ったサリーの弟やろ？

大田川 いいやないね誰が好きでも。

あさみ (重蔵に) あの。

重蔵 なに。

あさみ テキ屋の手伝いをさせてもらえんでしょうか。

重蔵 は？

あさみ 色んなところを旅するんでしょ？

重蔵 そりやもう。

敏子 テキ屋になりたいと？

あさみ うちの母が、私の父親はテキ屋さんやというちよりました。

敏子 お父さん？

あさみ 私は父親の顔も名前も知らんです。

敏子 へえ。

あさみ 色んなところ旅したら、お父さんに会えるかも知れんと思うて。
敏子 そうね。

あさみ 仕事を手伝わせてもらえんでしょうか？
重蔵 …。

真弓が車から降りてくる。

真弓 やめつちよったほうがいいよ。
あさみ …。

真弓 ろくなことにはならんと思う。

重蔵 …。

敏子 …。

自転車に乗って雄太郎が出てくる。

雄太郎 すいません、うちの親父どんげしたでしょうか？

田畑 しのぶさんの店です。

雄太郎 まっこつ、またか。飲んだらいかんと医者に言われちよるのに。じゃ明日の縁日よろしくお願いします。失礼します。

雄太郎が去っていく。

あさみ …。

敏子 明日、ここで商売をするから、ちよつと覗きにくればいいやないね。ねえ、あんた。

重蔵 あ、ああ。

敏子 多分明日は晴れるやろう。

重蔵 ・・じゃあねえ、晴れるといいねえ。

あさみ …。

真弓 …。

重蔵 惚れたはれたと、天気は違う。夕立雷あられにみぞれ、お天道様に運を任せて東西南北揺られ揺られの旅舞台、当たり外れを恨むじゃないぞ、神様、頼んます。(テキ屋の啖呵風に)

手を合わせる重蔵の表情。それを見ているそれぞれの表情。
明かりが落ちていく。

残暑厳しい雰囲気。縁日の準備が進んでおり、土手の向こうに屋台が組み上がっていく。忙しそうに働く、重蔵、敏子、真弓、小玉、有江、田畑、大田川ら、現れたり土手の向こうに消えたり。それを見ながら丈太郎が上機嫌で椅子に腰掛けている。

丈太郎 うるせえぞ、蝉、夏は終わりやど。

小玉 大将、蝉だって生きちよるとやから。

丈太郎 (笑って) そらそうや。おい、ラムネ買ってこい。

大田川 はい。

大田川去る。

小玉 一匹の蝉でもたくさん集まれば、大きな声になる。

丈太郎 何をぶつぶつ言うちよるとか。

小玉 選挙演説に使えろと思うて。

丈太郎 おお。

小玉 一人一人の小さな声でも、一致団結すれば大きな力になる。まさしく蝉のごとくであります。

丈太郎 おい、蝉の寿命は短けえど。

小玉 ああ、そらいかん縁起が悪い。

丈太郎 しかし、何を考えて蝉は鳴くとやろうかね。

小玉 なんか望みがあるでしょう。

丈太郎 なんの？

小玉 さあ。

丈太郎 小玉、お前議員になるとやったら、きちんと市民の声に耳を傾けるよ。

小玉 はいはい。

有江 (顔を出し) 小玉さん、天幕張るかい手を貸して。

小玉 おう。

重蔵 (車から荷物を)

丈太郎 久しぶりやこんげな活気は。

重蔵 そうね。

丈太郎 まあ、昔と比べたらあれやけんどん、ネタはなんね？

重蔵 今日はせとのわんちやを。

丈太郎 じゃったじゃった、金丸一家と言えば茶碗やった。

重蔵 せっかく油津で商売をするとやから、親父のやりよったネタがいいと思うて。ひさしぶりやけんどん。

丈太郎 親父さんの啖呵、何となく耳に残っちよるね。瀬戸物を手に持ってちんちん音を立てて・・(啖呵) ちんちん、つるつる見事な茶碗やど、穴もなけりや毛もはえちよらん、あんまり滑りがいいもんで、ハエがとまって怪我

をする、ちんちん。

重蔵 (啖呵) 皿は皿でん、皿が違う、いまさらあのさらことさらええさら、まっさらさらに上等の皿、引っ張っても伸びず、洗うても縮まず、だけど投げたら割れまする、ちんちん。

丈太郎 懐かしい。

田畑 女子もおるとですから、ちんちんは止めてください、恥ずかしい。

丈太郎 馬鹿かお前。日本の大切な文化やど。

田畑 文化？

丈太郎 縁日には日本の文化があるとやど、スーパーには文化はねえやろが。

田畑 知りません。文化包丁とか文化鍋は売っちゃりますけど。

丈太郎 いつのまにか滅びるとやろうね。

重蔵 大きな街のでっかい神社の縁日はなくならんやろうけど、こんげな田舎の

縁日はいつか消えてしまうとやろうね。

丈太郎 寂しいことやね。田舎の文化を守らんと。

小玉 (ひもを取りに戻ってくる)

丈太郎 小玉、お前議員になったら油津の文化のためにがんばれよ。

小玉 なんの話ですか？

丈太郎 金んこつばかり考えよったら、馬鹿になるど。

小玉 金も大事、生活生活。

丈太郎 佐藤栄作に手紙でん書いてみるか。

田畑 きれいな海と青い空があったらそれでいいとやないですか。

丈太郎 それも一理ある。

小玉 日向ぼけで馬鹿になるど。

祭り囃子が聞こえてくる。

丈太郎 お、いいねえ。

田畑 誰がやりよんなるとやろ。

丈太郎 久しぶりに聞いたが、油津にも文化が残っちゃったねえ。

田畑 今年は本格的にやるとでしょうか？

丈太郎 さあ。

ラッパ型のスピーカーを抱えて雄太郎が出てくる。

丈太郎 なんかさそれ？

雄太郎 音楽でん流れてないと寂しいやろうと思うて。

丈太郎 人が演奏しちよるっちゃねえとか？

雄太郎 レコードレコード。神社でレコード回してそれをマイクでひろうて、このスピーカーにつながっちゃう。

丈太郎 まっこつ情緒もへったくれもねえね。意味がわからん。

雄太郎 これが文明の利器やる。親父調子に乗って日向におったら身体壊すぞ。
丈太郎 子供扱いすんな。お好み焼き保健所の許可は取ったとやろうね。

雄太郎 言われんでもわかっちゃうよ。(田畑に) どうか調子は。

田畑 大丈夫です。

雄太郎 (重蔵に) ご苦労様です、なんか手伝いましょうか？

重蔵 いや、いい、いい、割れ物やから。

お囃子のレコードの針が飛ぶ。

雄太郎 あ、針が飛んだ。

雄太郎が去っていく。

丈太郎 まっこつ何が文明の利器か。

重蔵 立派な息子さんやね。

丈太郎 うんにやうんにや、お恥ずかしい。まあ、商売の才能はあるこつある。

今度吾田と飴肥にスーパーの支店を出すげな。

重蔵 へえ。

丈太郎 何のかんのいうてもいい時代よな。若い者が片道の燃料積んで、軍艦に体当たりせにやならんかった時代もあったとやかい。ついこないだんこと

やが。

大田川が戻ってくる。

大田川 ラムネ買ってきました。(バケツに数本突っ込んでくる)

丈太郎 おお、サンキュウ。おお、こら冷えちよる。(重蔵に一本)

重蔵 いただきます。

丈太郎 ・・こん、ラムネん玉を、宝石のごつ思うちよた頃があったね。

重蔵 へえ、あんたにもそんな美しい少年時代があったとな？

丈太郎 そらあるやろ。生まれつき髪が薄いわけやないど。

重蔵 そらそうや・・まさか、あんたとこんげして一緒にラムネを飲むとは思
ちよらんかった。

丈太郎 じゃあねえ、敵同士やもんね。じっくり話をしてみればたいがい悪い奴
はおらん。

重蔵 ・・人殺しでん乞食でん、話を通じると誰かが言うちよった。

丈太郎 ・・天皇陛下とマツカーサーは何を話したとやろかね？

重蔵 そんなことは知らん。

丈太郎 話を通じたつちやろか。

重蔵 急になんの話ね。

丈太郎 思いつきよ。

重蔵 ・・あんた特攻の生き残りやもんな。

丈太郎 正確にはちよこつつ違うけんどんね。

重蔵 は？

丈太郎 正確には特攻の基地の、雑役兵やった。

重蔵 雑役？

丈太郎 滑走路の整備したり、草を刈ったり。

重蔵 あんた特攻特攻で闇市をぶいぶいいわしちよったやないね。

丈太郎 そんげせんと格好がつかんやろが。

重蔵 (ラムネ)返す、いらん。

丈太郎 もう飲んだやろうが。

重蔵 やっぱ話なんか通じらん。

丈太郎 すまんすまん、ああ、言うてすつきりした。

重蔵 こっちはすつきりせん。

丈太郎 俺に飛行機操縦するような頭はねえ。

重蔵 まっこつ。

丈太郎 じゃけんどん、死んでいく兵隊はえれごつ見たど。

重蔵 ・・。

丈太郎 ラムネん玉んごつきれいな目ん玉しちよった。

重蔵 そうね。

丈太郎 あんた兵隊は？

重蔵 近眼と乱視で丙種合格、それでん最後には、小倉の連隊に・・。

丈太郎 どんげした？

重蔵 戦争はどうも性に合わんというようなこつをちよこつつ口にしたら上官連中に殴られて、半殺しの目に。

丈太郎 そつで？

重蔵 重営倉に放り込まれて、このまま死ぬとやろかい思うちよつたら、終戦やつた。

丈太郎 へえ、死なんでよかつたね。

重蔵 薄暗い営倉ん中で、親父の啖呵売の口上を念仏んごつ、ぶつぶつ唱えちよつた。

丈太郎 ・・見事なテキ屋魂やね。

重蔵 それしか俺は知らん、俺はテキ屋のせがれよ。

丈太郎 そうね。

重蔵 争いごとはむいちやらん。今になって思えば営倉送りでよかつた。

丈太郎 しかしそんげなあんたがよう所場を取り返しに油津に帰ってきたねえ。

重蔵 話し合えば何とかなるかも知らんと思うて。

丈太郎 人殺しでん話は通じるか(笑う)。

有江、小玉がこちら側へ

有江 ひゃあ、暑い。

丈太郎 おう、ラムネが冷えちよるど。

有江 一服一服。

丈太郎 急がんでもいいが、どうせ客が来るとは夕方やが。

有江 久しぶりに働いたど。

小玉 税金泥棒。

有江 小玉さんも公共事業で生きちよるやないね。

小玉 お前と一緒にすんな。

丈太郎 ここは社会の寄生虫の集まりか？

小玉 (重蔵に) あんたん娘えらいむつつりしちよるね。

有江 つまらん顔して仕事しよるど。

重蔵 ・・。

小玉 幾つね？

重蔵 十八、高校は何とか行かせたけど、大学には行かせられんかった。何しろ

あれでんうちの大事な働き手やかい。

小玉 好きな道歩かせてやらんと、後で恨まるつど。

丈太郎 なんが好きなの道か、俺たちやそんげな道歩いた記憶はねえど。

小玉 時代が違いますでしよ。

丈太郎 嫌な道歩かされて、無茶もしたが必死に生きて、気がついたら何をして

いいか、わからんとやど。

有江 じゃあじゃあ。

小玉 丈太郎さん自分が被害者んごついうて。

丈太郎 被害者やろが。

小玉 物事にはなんでん両面があるやろが。

重蔵 俺はあんたたちに被害を受けた。

小玉 愚痴をいわんで頑張らんと。

有江 何を頑張るとね？

小玉 警察官としての仕事があるやろが。

有江 たいした事件も起こらんとに、手柄の立てようもねえど。

丈太郎 油津で暴れちよるころが一番楽しかった。

有江 じゃあじゃあ。

小玉 じゃあじゃあ言うな。

有江 じゃあじゃあ。

丈太郎 人生五十年ならそろそろ俺たちや終わりやど。何かが腑に落ちん。

重蔵・小玉・有江 じゃあじゃあ。

重蔵 人生五十年もたまらんけんどん、逆に無駄に長生きするともたまらんど、

日本人の平均寿命はぐんぐんのびちよるらしいから。

丈太郎・小玉・有江 じゃあじゃあ。

敏子出てきて。

敏子 何ですかじゃあじゃあ教の集会ですか？

重蔵・丈太郎・小玉・有江 じゃあじゃあ。

敏子 あんたわんちやを早う運んでください。

丈太郎 敏子さんそんげ慌てんでもいいが、すこし休みない。ここは油津やど。

敏子 久しぶりの油津で気合いが入っちゃいますと。一本もらいます。(ラムネ)

丈太郎 どうぞ。

小玉 敏子さんのお父さんお母さんはこっちな？

敏子 空襲ん時に・・。

小玉 ああ、そうやったかね。

丈太郎 重蔵が頼りやね。

敏子 頼りにしちよります。

有江 こんげな小さな町に爆弾落とさんでもいいような気がするが。

重蔵 港があったかいしうがねえやろ。

小玉 東京やら大阪は焼け跡に大きなビルが建ったが、油津じゃ三階建てがひと

つやかいね。これからどんどん発展させんと。

重蔵 変わらんでもいいような気がする。どこ行っても大都会じゃ目が回る。

小玉 そんげなわけにはいかんやろ。経済的に発展をせんと。

重蔵 知らんうちにまた尻叩かれて歩かされとるような気がする。

有江 どこに向かって歩かされとるとね？

重蔵 知らん。

丈太郎 あんまり難しい話はすんな、ここは油津やど。

敏子 じゃあじゃあ、働いてご飯食べて生きていくしかないとやから。

雄太郎が戻ってくる。

田畑と大田川も戻っている。

雄太郎 親父、祭りの余興のことやけんどん。

丈太郎 おう。

有江 祭りの余興？

小玉 何ね？

丈太郎 昔祭りが賑やかやったころはのど自慢やら田舎芝居やらやりよったやろが。

有江 じゃったじゃった。

丈太郎 客寄せになんかした方が盛り上がるとやないやろかと思つて。

小玉 何するとね？

丈太郎 たいしたことは出来んやろうけど。

雄太郎 神社の境内で僕に歌えつて言うんですよ。

丈太郎 お前わけのわからん歌をいつも歌いよるやろが。

雄太郎 フォークソングが唯一の趣味やとです。

有江 フォークソング。

丈太郎 戦争反対の歌げな

雄太郎 高石友也とか岡林とか。

丈太郎 客寄せやが歌え。

雄太郎 俺の歌で客なんか集まるわけがないやろに。

丈太郎 お前いつも顧客サービスが大事やというちよるやろが。ここいらの人間はものを知らんから、間違えて集まるかもしらんど。

丈太郎 みつともないって。

有江 おもしろそうやね。

田畑 それやったら重蔵さんも一緒に歌えばいいとやないですか。

丈太郎 重蔵？

田畑 夕べお上手やったですよ、ギター持ってタイガース。

丈太郎 タイガース？

重蔵 おいおい。

丈太郎 あんた楽器が出来るかね？

敏子 博多で一時、流しをしちよったもんやから。

丈太郎 へえ、そら面白い、タイガースとは男のくせにおかつば髪で歌う連中やろが。

有江 えれ人気やど。

丈太郎 よっしゃそつでいこう。

重蔵 いやいや。

丈太郎 バンドでいこう、反戦よりその方が派手やが。油津タイガース。

重蔵 油津タイガース？

有江 そらいいわ。

丈太郎 雄太郎、スーパーの新年会の余興で使った、カツラがあるやろが。あれ用意せえ。

雄太郎 本気で言うちよるとね？

丈太郎 祭りの恥は掻き捨てやど。よっしゃ俺がジュリーやろ。

雄太郎 親父がジュリー？

田畑 うそお。

丈太郎 のどには少々自信があるど。

大田川 絶対受けますよ。

丈太郎 な。客がきやあきやあ言うど。

小玉 いい年してみつともない真似は止めちよったほうが。

丈太郎 何を言うちよるか、決めた。

有江 こん人は言い出したらきかんど。

丈太郎 あんた選曲頼むど、派手なやつ。

重蔵 冗談やないど。

敏子 やればいいやないね、祭りやが。

重蔵 勝手なこついな。

敏子 二十年ぶりの油津やないね、賑やかにいこうや。

重蔵 …。

丈太郎 じゃあじゃあ、金丸の親父さんもきつと喜びなる。

雄太郎 じゃあカツラ取ってくる。

丈太郎 おう。

重蔵 おい。

雄太郎が去る。

丈太郎 さすが俺ん息子や、飲み込みが早い。

重蔵 カツラなんかかぶらんど、この頭でカツラかぶったら惨めになる。

丈太郎 まあまあ、落ち着かんね（笑う）。

重蔵 笑い事やないど。

皆笑っているところにあさみが出てくる。

重蔵 …。

あさみ 母が麦茶を差し入れてこいって。

重蔵 あ、ああ、そうね、そらご苦労さん。

あさみ お昼に、握り飯を持ってくるって母が言うちよりました。

丈太郎 そらすまんね。

あさみ …。

敏子 あさみちゃんやったね、あんたテキ屋に興味があるとやろ？

あさみ （頷く）

敏子 あんた教えてあげれば。

重蔵 …。

敏子 何ね？

重蔵 何でもない。

有江 あら、顔が赤うなつちよる、やつぱ若い娘が好みやろかい。

重蔵 （怒鳴る）下らんこと言うな。

有江 …本気で怒らんでも、冗談やが。

重蔵 …よし、じゃあ、そこん茶碗運ぶと手伝ってくれ。

あさみ はい。

重蔵 割れ物やから慎重に。

あさみ はい。

敏子 気をつけて。

あさみ はい。

重蔵とあさみが土手の向こうに。

敏子 あの子のお父さんテキ屋やったげな。

有江 テキ屋？

丈太郎 そんな話初めて聞いた。

小玉 どのね？

敏子 知らん・・・(一瞬不安な表情になり) さ、仕事してこよう。

敏子も土手の向こうへ。

丈太郎 ・・まさか。

小玉 まさか。

有江 ・・・。

丈太郎 おい、何か知つちよるとやないやろね。

有江 何も知りません。

丈太郎 重蔵の子供やないやろね。

小玉 計算上は合うちよる。

丈太郎 冗談やねえど、しのぶは俺が狙うちよるとやど。

小玉 そうと決まったわけやないとですから、落ち着かんですか。

丈太郎 おい、ほんとに何も知らんとやろね？

有江 知りません。

丈太郎 くそ、所場は取ったけんどん、女は重蔵が独り占めか。

有江 声が大き。

丈太郎 まっこつ。

有江 どちら、仕事仕事、お好みのキャベツでん刻んでこよう。

有江も土手の向こうへ。

丈太郎 ・・胸が痛い。

小玉 え？

丈太郎 この痛みはやっぱしのぶへの恋やろか。

小玉 いい年こいて。

丈太郎 蘇る青春の痛みやね、片思いこそまことの恋。

小玉 (呆れて) どちら、俺はいつペン会社に戻らんと。

丈太郎 夕方までに戻れよ、久しぶりに楽しいやろが？

小玉 (頷いて) まっこつ。

丈太郎 テキ屋の口上も練習しちよけよ。

小玉 ・・ご通行中の皆様、小玉仙一が最後のお好み焼きを焼きにやって参りました。

丈太郎 選挙やねえど。

小玉 (笑って) ほしたら。

丈太郎 おう。

小玉が去っていく。

丈太郎・・・。

真弓が出てくる。

真弓・・・。

丈太郎 あんたも大変やねえ。

真弓 いいえ。

丈太郎 親を恨んだらいかんど、どんげな親でん、親は一生懸命やど。

真弓 わかつちよります。

丈太郎 人生は一本道やないど、いずれあんたの道が、見えてくる時があるが。

真弓・・・。

丈太郎 そんな時に親のありがたさがようわかる。

真弓・・・トイレ。

真弓が便所へ。

丈太郎・・・ま、おれはこの年になってん、親のありがたさがようわからんけん

どん。

田畑 ちよこつつ雲が出てきましたね。

丈太郎 天気予報は一日晴れやろが。

田畑 でも、何か怪しか雲行きですね。

丈太郎・・・乙姫様に賽銭でもあげてくつか。

田畑 私たちも朝あげたとですけど。

丈太郎 誰と？

田畑 宏君と・・・嬉しかったあ。

丈太郎 馬鹿かお前、男連れでお参りしたらいかんとやど。

田畑 迷信でしょ？

丈太郎 雨が降ったらお前らのせいやど。

田畑 そんな。

丈太郎 まっこつ近頃の若えもんは。

丈太郎が乙姫様の方へ去る。

田畑一人、泣きそうな顔で駐車場に残っている。

便所から真弓が出てくる。

田畑・・・。

真弓 何かしたとですか？

田畑 雨が降ったら私のせいやと言われて。
真弓 (空を見上げる)

田畑 私が宏君とお参りしたもんやから。

真弓 そんな迷信、馬鹿馬鹿しい。

田畑 でしょう。

真弓 ・・雨が降ったら中止やろか。

田畑 ・・。

真弓 可哀想。

バケツを抱えたあさみが出てくる。

あさみ 茶碗を洗うから水を汲んできてくれと言われて。

真弓 そうね。

あさみを追うように大田川が出てくる。

大田川 水汲み手伝うてやろうか？

あさみ いいえ、大丈夫です。

大田川 力仕事は男の仕事やから。

あさみ いいえ。

大田川 遠慮せんでも。

田畑 何ね宏君、妙に親切にしてから。

大田川 何か？

田畑 何か下心見え見えやが。

大田川 何いうちよるとか。

田畑 乙姫様に一緒に手を合わせたやないね。

大田川 お前が無理矢理に。

田畑 無理矢理？

大田川 何か？

田畑 私の心は土砂降りの雨んごつある。

田畑が去っていく。

田畑 何かあの女。

あさみ 水汲みは自分でしますから。

田畑 ・・そうね。

風呂敷に包んだおにぎりを抱えてしのぶがやってくる。

しのぶ ご苦労様。

田畑 どうも。

しのぶ 暑い中大変やねえ。

田畑 いいえ。

しのぶ これお昼に皆さんで。

田畑 どうもすいません。

田畑が風呂敷包みを抱えて土手の向こうへ消えていく。

真弓もしのぶに一札をして去っていく。

あさみがバケツに水がたまるのを待っている。

しのぶ 手伝うちよるの？

あさみ (頷く)

しのぶ 優しくしてもろうちよる？

あさみ 誰に？

しのぶ 誰にって・・・。

あさみ お母さん、まさかあの人、私のお父さんやないやろね？

しのぶ 急に何ね？

あさみ お母さんの様子を見ちよったら何となく。テキ屋さんやし。

しのぶ 何を言うちよるとね。

あさみ 違うなら違うでいいけどん。

重蔵が様子を伺いつつこっそりと出てくる。

重蔵 ・・・。

しのぶ あらどうも、ご苦労様。

重蔵 ・・・どうも。

しのぶ 娘が世話になって。

重蔵 どういたしました。

あさみ ・・・。

重蔵 水汲んだら茶碗を洗うてくれ、久方ぶりでホコリをかぶっちよるから。

あさみ はい。

あさみがバケツを抱えて土手の向こうへ。

重蔵 おい、頼むからうちよるせんじよつてくれ。

しのぶ 何が？

重蔵 今さらあれこれ言われてん、どうしようもねえやろが。

しのぶ 今さらって。

重蔵 俺が油津を離れる時、お前はいかんというたやろが。

しのぶ それを言われたら返す言葉がないけどん・・・。

重蔵 謝る、この通り謝るから。

しのぶ 別に今頃謝ってもろうても。

重蔵 そしたらどんげしたらいいとか？

しのぶ どんげもこんげも・・・何をしてもらいたいと思うちよるわけやない。

重蔵・・・

しのぶ ただ、あんたに逢いたいと。(涙ぐむ)

重蔵 泣かんでくれ、頼む。こんげなところ女房に見られたらこの夜の終わりやが。

しのぶ だって。

重蔵 お前が泣くと俺も泣きたくなる。

しのぶ 一緒に泣いて。

重蔵 いかんて。

大田川が土手に現れ。

大田川 おにぎりどんげします？

重蔵 そつちに置いちよつてくれ。

大田川 はい。

大田川引っ込む。

重蔵・・・ひとつ教えてくれ？

しのぶ なんね？

重蔵 あの子は、俺の、娘なのか？

しのぶ・・・

重蔵 何で黙る？

しのぶ あの子があんたの娘やったとしても、今さらあんた、どうにもならんとやろ？

重蔵・・・

しのぶ それやったら本当のことなんかいうても仕方ない。

重蔵 じゃけんどん。

しのぶ 自分の子供かどうかぐらい、親やったらわかるやろ？

重蔵 子供のような気もするし、そうじゃないような気もするし・・・

しのぶ・・・

重蔵 頼む教えてくれ、頼む。

しのぶ 聞いてどうするつもり？

重蔵 聞いてから考える、このままじゃどんげやって対処したらいいかわからんやろが。

しのぶ・・・内緒。

重蔵 え？

しのぶ 内緒。

重蔵 おい、ほんとに泣くぞ。

しのぶ 少しぐらい苦しみなさい、捨てられた女の悲しみに比べたら何のこつがあるもんね。

重蔵 しのぶ。

敏子が出てくる。

敏子 あんた何しちよるの？

重蔵 何でもない何でもない。

しのぶ どうも。

敏子 おにぎりどうもありがとうございます。

しのぶ いいえ。

敏子 あんた顔色が悪いよ。

重蔵 日射病やるかい？

しのぶ 天気が持つといいですねえ。

敏子 ええ。

しのぶ だいぶ雲が出てきましたね。

敏子 まっこつ。

重蔵 ぞら、少し気分が悪い、車の中で少し休憩じゃ。

敏子 大丈夫ね？

重蔵 大丈夫大丈夫、少し休めば楽になるやろ。

重蔵が車の中へ。

敏子 ・・可愛らしい娘さんですねえ。

しのぶ そうですか、ろくなしつけもしとらんもんで。

敏子 昔、こっちで会ったことありますか？

しのぶ さあ。

敏子 ずっと油津で？

しのぶ 元々は飢肥の方で。

敏子 二十年前も？

しのぶ ええ・・たまには油津にも来ましたけど・・。

敏子 それやったら私の勘違いかしらんですねえ。

しのぶ ええ。

敏子 女手一つで娘さんを？

しのぶ はい。

敏子 大変やったでしょう？

しのぶ いいえ、馬鹿な親ですから、娘が一人でしっかりして。テキ屋さんも大変でしょう？あっちこっち旅して。

敏子 いいえ、私は何にも。亭主はたまに車の中で泣いちよりますが。
しのぶ へえ。

敏子 この車が家みたいなもので、うちの人が泣くと海に浮かぶ船みたいに車が
ゆれて。

しのぶ へえ。

敏子 ・・娘さんのお父さんは？

しのぶ さあ、どこで何をしちよるのか。

敏子 ご存じないですか？

しのぶ 知つちよるような、知らんような。

敏子 どんな方ですか？

しのぶ 忘れました、ろくでなしです。

敏子 ろくでなし・・。

しのぶ ・・。

重蔵の乗った車がゆれている・・。

明かりが落ちていく。

五 日の暮れる頃

祭りの余興が始まろうとしている。

客を呼び込む大田川の声。

大田川 ええ、港油津乙姫神社、漁の安全、大量を願う、乙姫豊漁祭の季節が今年もやって参りました。今年は特別に、乙姫神社特設ステージにおきまして、お楽しみ歌謡ショーを開催いたします。ご用とお急ぎでない方、どうぞ、お集まり下さいませ。提供はスーパー丸一、出演は油津タイガース、油津タイガースの皆さんです。おじいちゃん、おばあちゃん、おとうさん、おかあさん、娘息子に孫ひ孫、お手々つないで乙姫神社、油津タイガースの演奏をどうぞごゆっくりお楽しみ下さいませ。

重蔵、丈太郎、小玉、有江、雄太郎。かつらをつけて並んでいる。
ショーつぽく回り舞台で登場する。演奏が始まる。

丈太郎 油津タイガース、ジュリーです。

重蔵 みつともないが。

丈太郎 カモンミュージック。

※「シーサイド・バウンド」1番を歌った後

ララ ララララララララー

ララ ララララララララー・・・

縁日行こうよ今日はお祭りだもの
金魚をすくえお好み焼きも食べよ

乙姫神社です海の守り神です

縁日行こうよ財布握りしめて

カツオ トビウオ マグロ

キビナゴ シイラ タチウオ

イセエビ サザエ イワシ

カワハギ イカタコ マダイ

縁日行こうよ今日はお祭りだもの

歌、切りの良いところで雷が鳴り響き、雨が降り出す。

丈太郎 まずい降り出したぞ。

重蔵 くらいかん、露天にシート。

有江 えれ降りや。

雨の中、皆（他の登場人物も）バタバタと片付けに走り回る様子。

「急げ」「そっちそっち」「手を貸せ」などなど声。

舞台回転して元へ戻る。

社務所の小屋に、重蔵、丈太郎、有江、小玉が雨宿り。

車の後ろのドアを開け雨除けにしている、敏子、真弓、あさみ。

次第に雨、小降りになる。

小玉 ・・もうすぐ止むやろ。

有江 雨が止んでん、これじゃ客はこんやろな。

重蔵 ・・。

丈太郎 まっこつ間の悪い。

小玉 何か気持ちがあつと盛り下がった。

丈太郎 子供ん頃こんげなこつがようあつた。

小玉 あつたあつた、調子に乗ってはしゃいじよつたら、急に冷や水浴びせかけられて。

有江 じゃあじゃあ。

重蔵 もう俺たち子供やねえど。

有江 じゃあじゃあ。

敏子 いつまでかぶつちよるとですか？

有江 あ。

敏子 乞食の雨宿りんごつある。

重蔵ら、かつらはずす。

小玉 これで票が減ったかも知らん。

あさみ 今日はどうするとですか？

敏子 とりあえず様子を見るしかないやろ、それもテキ屋の仕事。

真弓 何もかんも運任せ、所場も天気も。

敏子 そんげなことないわよ。

真弓 そんげなことあるわよ。

有江 テキ屋だけじゃねえやろ、生きちよりや大抵運任せよ。

丈太郎 運をつかむにや実力がいるど。

有江 何の実力か？

丈太郎 そらあ、一生懸命ちゆうこつやろ。

敏子 一生懸命頑張ればきつと何とかなると思わんと、生きて行かれんもの。

有江 それやったらあんまり自信がねえなあ。

雨合羽姿の田畑と大田川が出てくる。

田畑 すいません、雨が降ってしもうて。

丈太郎 もういい、迷信、迷信。

田畑 てるてる坊主でも作りましょうか？

丈太郎 もういい。

雄太郎が出てくる。

雄太郎 おい、そろそろ露店片付けるぞ、今日はもう無理やが。

丈太郎 おい、そんげ急がんでもいいやろが。

雄太郎 客もこんとに、やってもしょうがないやろ。おい片付ける。

大田川 はい。

田畑、大田川、土手の向こうへ。

雄太郎 親父ももう十分楽しんだやろ、雨降りにうるうるしちよったら風邪ひくど。

丈太郎 子供扱いすんな。

雄太郎 小玉さんも有江さんもご苦労様でした。

有江 あ・・・ああ。

小玉 ・・・。

敏子 もう少し待ってみませんか、そろそろ雨も上がりそうやし。

雄太郎 さつき漁協で天気予報みたら、この雨はしばらく止まんそうです。もう七時になりますし、明日の仕事もありますし。この辺りはこの時間になったら誰も外には出てこんですよ、ご存じやと思います。

敏子 ・・・。

雄太郎 いつまでも遊んじよるわけにはいかんし。

重蔵 何が遊びか？

雄太郎 え？

重蔵 こつちは必死やど、何が遊びか？

雄太郎 すいません。

重蔵 (涙ぐみ) 何が遊びか・・・。

雄太郎 ごめんなさい。

敏子 あんた。

あさみ 私、乙姫様にお願いしてきます。

敏子 あさみちゃん。

あさみ じつとしちよられません。

あさみが乙姫様の方へ。

重蔵 情けねえ・・・何しにこんげなところ帰ってきたとか。

真弓 父ちゃんいつまで泣くつもりね？

重蔵 ・・・。

真弓 泣いてどうなるかね？

敏子 真弓。

真弓 何をどうしたいとか、私にはさっぱりわからん。そんな人の言うとおりに私は遊びにしか思われん。

雄太郎 いやいや遊びだなんて。

真弓 さつき言うたでしょう。

雄太郎 言いました、ごめんなさい。

真弓 昔を懐かしがって、何の意味があるかね？

重蔵 ・・・。

丈太郎 あんたは若いからそういう気持ちはわからんやろうけんどん、昔話にす

がりたい時もあるとよ。

真弓 明日死ぬわけじゃないとでしょ？未来を語ってください。

丈太郎 はい、すいません。

有江 母親譲りやねえ。

敏子 すいません。

小玉 娘さんの言うとおりのや、未来を語らんと。

有江 何の未来ね？

小玉 こん田舎町を発展させて生き甲斐のある社会にせんと。

有江 どんげして？

小玉 そらあみんなで知恵を出しおうて。

有江 どんげな知恵な？

小玉 色々やろ。

有江 さっぱりわからん。

遠くで雷の音がする。

丈太郎 だいぶ遠なつたようやが。

有江 うん。

小玉 降り止まん雨はないやろ。

有江 ないない。

敏子 泣き止まん男はおるけんどん・・あんたどんげすると？

重蔵 どんげもこんげもねえやろ、乙姫様の祭りは一日だけやが。雨が降ったら

そつで終わりや。

丈太郎 親父さんにはなんて言うとか？

重蔵 親父には・・。

有江 ・・どら、そろそろ片付けようかい？

小玉 うん、そうやね、降り止まん雨はないが、長引く雨はある。

有江 待つちよつても仕方ない。

雄太郎 こつちでやりますから。

小玉 いいがいいが。

小玉と有江が土手の向こうへ行きかける。

丈太郎 待て。雄太郎、墨と紙。

雄太郎 墨？

丈太郎 重蔵の親父に一筆書く。あと写真機持ってこい。

雄太郎 写真機？

丈太郎 露店の片付け止めさせろ、写真撮ってかいじゃ。

重蔵 もうそんげなことは。

丈太郎 いいからはよ持ってこい。

雄太郎 はいはい。

雄太郎が去っていく。

有江 こんげな雨降りに写真撮ってん、寂しいことになるやないやろか？

小玉 うん。

丈太郎 うるせえ、このまま重蔵を親父のところに戻らせられんやろが。

小玉 そうは言うても。

丈太郎 小玉、お前女房と娘連れてこい。

小玉 はあ？

丈太郎 有江、警察官集めろ。

有江 何ですか？

丈太郎 サクラよサクラ。

有江 サクラ？

丈太郎 嘘でも賑やかにするとよ。

有江 本気で言うちよんなるとな。

丈太郎 本気やから言うちよる。はよせんか。

敏子 丈太郎さん。

丈太郎 出来るだけのこつはせんと、はよ行かんか。

重蔵 やめてくれ。

丈太郎 ……。

重蔵 わけのわからん親切はやめてくれ。

丈太郎 何を言いよる？

重蔵 元はと言えばあんたが俺たちを追い出したからこんげなこつになっちよる。

丈太郎 じゃかい俺も一生懸命。

重蔵 一生懸命なんかせんでくれ、余計惨めになるだけやが。何がなにやらさつぱりわからんこつなる。

丈太郎 ……言われてみればその通りや。

重蔵 これでん俺も男やど。

丈太郎 じゃあ、どんげする？

重蔵 ……。

丈太郎 相撲でんとるか？

重蔵 相撲？

丈太郎 喧嘩は出来んでも相撲ぐらいとれるやろ？

重蔵 いやいや…。

丈太郎 娘の前で見事俺を投げ飛ばしてみろ。

重蔵 暴力は…。

丈太郎 どんげした？小玉行司をやれ。

小玉 え？

有江 丈太郎さん腰は？

丈太郎　こんげな男投げ飛ばすとに、腰なんか関係ねえ。一ひねりじゃ。
重蔵　・・。

丈太郎　泣きの重蔵、かかってこんか。小玉、行司。

小玉　いやいや、そんげなこと。

有江　止めた方がいいが。

真弓　私がやる。

重蔵　おい。

真弓　私が行司。

敏子　真弓。

丈太郎　よっしゃ、乙姫様への奉納相撲じゃ。勝負。

重蔵　・・。

敏子　あんたしつかり。

真弓　男ならかまえんね、父ちゃん。

重蔵　はい。

真弓　見合って見合って、はっけよい、のこった。

敏子　あんた。

重蔵と丈太郎が組み合うがへっぴり腰の重蔵、すぐに投げられる。

敏子　あんた。

真弓　今のは練習、もう一番。

重蔵　え？

丈太郎　よし、いいやろ、こい。

真弓　見合って見合って、はっけよいのこった。

重蔵、またすぐに投げられる。

真弓　もう一番。

丈太郎　なんぶでもこい。

重蔵　くそお。

真弓　はっけよいのこった。

敏子　行け重蔵。

小玉　腰を入れんか。

重蔵また投げられる。

真弓　もう一番。(泣き出しそうになっている)

丈太郎　かかってこい。

重蔵　丈太郎。

重蔵、気合いを入れてかかっていくがそれでも投げられる。
二人とも息が上がっている。あさみが戻ってくる。

あさみ なんごつですか？

敏子 相撲大会。

あさみ 相撲大会？

真弓 もう一番。

丈太郎 もう一番？

敏子 あんた男を見せんね。

真弓 見合って見合ってはつけよいのこった。

小玉 死ぬ気で頑張れ。

有江 根性見せろ。

敏子 あんた。

重蔵 くそお、くそお。

重蔵と丈太郎、必死で組み合っている。

あさみ 頑張れお父さん。

丈太郎 お父さん？

一瞬の隙を突いて重蔵が丈太郎を投げ飛ばす。

小玉 よっしゃ。

有江 お見事。

重蔵 投げた、投げたど。

敏子 あんた、ようやった。真弓、勝ち名乗り。

真弓 金丸重蔵。

重蔵 (激しい息づかい)・・・

丈太郎 何のこつか。

真弓 ・・・。(こみ上げて激しく泣き出す)

重蔵 真弓。

真弓 父ちゃん。

丈太郎 (立とうとして) あたたた。

有江 大丈夫ですか？

重蔵と真弓、二人で泣いている。

小玉 親子やねえ。

有江 まっこつ。

敏子 (しばらく喜んでいいるが・・) ねえあんた、さっきお父さんって言わんか

つた？

あさみ いいえ、そんなこと。

敏子 確かにそう聞こえたけどん。

あさみ 聞き間違いやないですか。

敏子 そうやろか。

有江 敏子さん、旦那を誉めてやらんね。

敏子 ・・。

丈太郎 いたたた、腰をいわしたごつある。

有江 ああ、そらいかん。

丈太郎 手を貸せ。

小玉 はいはい。

丈太郎 ゆっくり立たせろ。

有江 大丈夫ですか？

丈太郎 痛い、触るな離せ。

有江 はいはい。

丈太郎 (離すとぐらつき) 支えろ。

有江 どっちですか？

小玉 こらぎっくり腰やねえ。

丈太郎 (何とか車に手をつけてじっと立っている) ふう、脂汗が出てくると。

一歩も動かれん。

敏子 あんたお父さんてどういうことね？

重蔵 何の話か？

敏子 誰がこの子のお父さんね？

重蔵 知らん知らん、何の話かさっぱりわからん。

敏子 何か隠しちよるやろ。

重蔵 知らんて言いよるやろが。

敏子 あんた。

重蔵が車の中へ。車がゆれると丈太郎が苦痛で顔をゆがめる。

敏子 あんた。

丈太郎 車を揺らすな。

敏子 出てこんね。

丈太郎 揺らすな。

敏子 うるさい。やましいことがないなら出てこんね。

有江 落ち着かんね敏子さん。

しのぶが出てくる。いつの間にか雨は止んでいる。

しのぶ なんごつですか、皆さん楽しそうに。

有江 あ、まずい。

しのぶ あいにくの天気で。

あさみ お母さん逃げて。

しのぶ は？

敏子 ぬけぬけとよう顔を出せたもんやね。

しのぶ え？

あさみ はよ逃げて。

しのぶ 何で？

あさみ 何でもいいから。

敏子 じっくりと私と勝負しようやないね。

あさみ 早く。

しのぶがよくわからないまま逃げていく。

敏子 待て、この女。

敏子が追っていく。

有江 えれこっちゃ。

小玉 どういうことか？

重蔵 (車から出てきて) 敏子はいっぺん火がついたら、ライオン並みやど。

有江 呑気なこと言うちよる場合か。

重蔵 どんげしよう。

丈太郎 重蔵、おまえやっぱりしのぶと、この野郎、あたたた。

有江 じつとしちよきねんか。

真弓 あさみさん、私と姉妹？

あさみ ……

真弓 父ちゃん。

重蔵 待て待て、早合点すんな、世の中色んなこつが複雑に絡み合うちよるとや

かい、簡単に答えは出らんとやど。

有江 妙な言い訳したらいかん。

小玉 じゃあじゃあ、あさみちゃんが可哀想やが。

あさみ ……お父さん。

重蔵 ……

有江 向こうの方が心配や、小玉さん。

小玉 おお。

重蔵 よろしく頼む。

有江 まっこつ。

丈太郎 おい、俺は？(動けないので)

有江 頑張ってください。

有江と小玉が去っていく。

重蔵　・・。

あさみ　・・・。

丈太郎　世の中うまいこつ出来ちよる、所場は取られてん、女に関しては一人勝ちやが、クソ、あいたた。

重蔵　下品な言い方せんじよってくれ。

丈太郎　自分のしでかしたことやろが。

重蔵　・・本当に俺の娘か？

あさみ　はつきりとは聞いちよらんけど。

真弓　そんなこと本人に聞いたら、可哀想。

重蔵　すまん。

真弓　・・いつの間にか雨があがつちよる。

重蔵　まっこつじや。

真弓　あさみさんが乙姫様、押んでくれたからやるか。

重蔵　・・。

真弓　父ちゃん。

重蔵　何か？

真弓　私、東京に行く。

重蔵　は？

真弓　このままやったら私絶対後悔するもん。

重蔵　こんげな時に急に。

真弓　ずっと考えちよったと。

重蔵　・・行って何するつもりか？

真弓　行って考える、とにかくここにおったらいかん。

重蔵　・・そうか。

真弓　止めんと？

重蔵　・・お前の人生やもんな、お前が決めたんなら仕方がない。

真弓　いいと？

重蔵　お前には十分、苦労かけた・・頑張れ。

真弓　・・じいちゃんに電話してくる。

重蔵　何て？

真弓　父ちゃんが丈太郎さん投げ飛ばしたって。

重蔵　・・。

真弓　きつとじいちゃん喜びなるやろう。

重蔵　うん。

真弓　あさみさん。

あさみ　はい？

真弓　よかったらテキ屋手伝ってあげて。

あさみ・・・。

真弓 泣き虫で愚図な父ちゃんやけど、悪い人やない。

重蔵 真弓。

真弓 父ちゃん、私も頑張る、父ちゃんも頑張れ。

重蔵 うん。

真弓 電話してくる。

重蔵 ああ。

真弓が去っていく。

丈太郎 立派な娘やねえ。

重蔵 うん。(もう涙ぐんでいる)

丈太郎 あの娘ならどこに行ってん大丈夫や。

重蔵 うん。

丈太郎 泣くな。

重蔵 うん。

丈太郎 泣きてえとはこつちや、あいたた。

あさみ 大丈夫ですか？

丈太郎 同じ姿勢もいかん、手を貸してくれ。

あさみ はい。

丈太郎 ゆっくりゆっくり。(社務所の方に)

重蔵 哀れやなあ。

丈太郎 やかましい。痛みがあるとは生きちよる証拠。

重蔵 色んなことに耐えながら生きていくしかないやね。

丈太郎 うん。あいたた。

重蔵 人生とはなんやろかい？

丈太郎 知らん。

重蔵 何もわからんまま終わりやろかい？

丈太郎 わかったふりして偉そうな顔するよりは、じたばたあがいちよる方がな
んぶかましよ。

重蔵 うん。そう思わんとやつちよられん。

丈太郎 あの世に行ったら誰かがご苦労さんて言うてくれるやろ。

重蔵 言うてもらえるように頑張らんと。

丈太郎 まっこつ。

重蔵 若い頃、自分の持ち時間に限りがあるとは思うちよらんかった。

丈太郎 そらそうやろ。あさみちゃん。

あさみ はい。

丈太郎 俺たちも昔は子供やったとやど。

あさみ そらそうでしょ。

丈太郎 あんたもいつか年を取るとやど。

あさみ 当たり前です。

丈太郎 わかっちよるとね？

あさみ わかっちよります。

丈太郎 うんにゃ、わかっちよらん。

あさみ そうですか？

丈太郎 わかるもんか。

あさみ はい。

丈太郎 意外と早いど、心して頑張りない。

あさみ ・・はい。

重蔵 昔話にすがっちよる場合やないね。

丈太郎 じゃあじゃあ。

重蔵 前を向いて進まんど。

丈太郎 ご褒美がもらわれん。

重蔵 まっこつ。

丈太郎 ・・こんげな呑気な話をしちよる場合か？もうすぐ修羅場やど。

重蔵 言われんでもわかっちよる。

雄太郎が戻ってくる。

雄太郎 親父、持ってきたど。

丈太郎 おう、あいたた。

雄太郎 どんげした？

丈太郎 人生の痛みを味おうちよる。

大田川と田畑が出てくる。

大田川 雨が上がりましたけど、どんげしましょう？

丈太郎 雨が上がれば商売するに決まっちよるやろが。

雄太郎 親父。

丈太郎 黙っちよれ。お前テキ屋になりたかったとやろが。

大田川 はい。

丈太郎 ここは金丸一家の所場やど、しっかりやれ。

大田川 はい、わかりました。金丸の親分さんにはお世話になります。姓は太田川、名は宏、人よんで大田川宏。

丈太郎 そのままやが。

大田川 以後お見知りおきを。

田畑 宏君かっこいい。

大田川 ついてこい。

田畑 はい。

大田川、田畑、土手の向こうへ。

丈太郎 どら。(紙に書き始める)

あさみ ほしたら私も準備を。

重蔵 ああ。

あさみ 頑張ります。

重蔵 後でわんちやの口上を教えてやる。

あさみ はい。

あさみが土手の向こうへ。

丈太郎 ・・・さあ、これでいいやろ、油津の所場、金丸一家にお返しいたします。

上原文太郎。

重蔵 (頭を下げて受け取る)

丈太郎 紙切れだけやなしに、油津に帰ってこんね。

重蔵 ・・・

丈太郎 言えた義理やないけどん、油津の所場を盛り立ててくれ、そしたら俺もまた喧嘩ができる。

重蔵 今度は簡単には追い出されんど。

丈太郎 おう、望むところよ。あいたたた。

雄太郎 大丈夫か親父。

丈太郎 大丈夫じゃねえ、俺を担いで家に連れて帰れ。

雄太郎 まっこつ、ほら。

丈太郎 ゆっくり担げ。

有江が戻ってくる。

有江 おい、妙なこつになっちよるど。

重蔵 どんげした？

有江 敏子さんとしのぶが小料理屋のカウンターに並んで座って話をしよる。

重蔵 何の話？

有江 知らん、隙間から覗いただけやが。

重蔵 喧嘩しちよるんか？

有江 うんにゃ、静かに話をしよる。

重蔵 恐ろしい。

有江 まっこつ、何とも言えん雰囲気やど。地獄でささやき合う女二人。

重蔵 大げさなこと言うな。

有江 それかい、陰気な歌声も聞こえたど。

重蔵 歌声？

有江 アカシアの雨がどうしたこうしたって。

重蔵 そらあいつの好きな歌やが、辛いことがあるとよう歌う。
有江 青白い炎のような歌やった。
重蔵 青白い炎。未来の話どころやねえね、今日で人生の終わりかも知らん。
有江 地獄に連れて行かれるかも知らんね。
雄太郎 (丈太郎を担いだまま) 何ですか？
重蔵 何でもない。

小玉が戻ってくる。

小玉 おい、来たど、敏子さんが来た。
重蔵 ……。

敏子が酒瓶をぶら下げて戻ってくる。

敏子 ……。
重蔵 ……。
敏子 ……二人つきりにしてもろていいやろか？
小玉 ……はい。
丈太郎 重蔵、死ぬなよ。

重蔵と敏子を残して、皆去っていく。

重蔵 ……。

敏子 あの子は？

重蔵 露店に。

敏子 雨上がったね。

重蔵 はい。

敏子 びくびくすんな。

重蔵 はい。

敏子 ……あの子、あんたの子やないげな。

重蔵 ……へえ。

敏子 保険証の生年月日を見せてもろた。あんたが油津を出てから出来た子供や
った。

重蔵 そうね。

敏子 笑わんでもいい。

重蔵 はい。

敏子 しのぶさん、あんたがおらんようになって、どうしていいかわからんごつ
寂しくなつて、行きずりの男と。

重蔵 行きずりの男？

敏子 そんなことあさみちゃんには言えんもんやから、あんたのお父さんは日本

中を旅しちよる立派なテキ屋の親分やと嘘をついて。

重蔵
・・。

敏子
不憫な話よ。

重蔵
そうか。

敏子
今の話、誰にも言うたらいかんよ、勿論あさみちゃんにも。

重蔵
ああ。

敏子
可哀想に。

重蔵
しかし、俺を父親やといつまでも思わせちよっていいとやろか？

敏子
それぐらい思わせてやりなさい、子供が出来るようなことをした覚えもあるとやろ？

重蔵
はい・・すいません。

敏子
そりゃあいつか本当のことが分かる時もあるやろうけど、今じゃなくてもいいやろ。

重蔵
うん。

敏子
自分の父親は立派なテキ屋だと、ずっと思うちよるんやもの。

重蔵
・・。

敏子
あの子のためにも、立派なテキ屋になんなさい。

重蔵
はい。

敏子
私や、真弓や、お父さんや、あんた自身のために。

重蔵
はい。

敏子
返事ばかり。

重蔵
これがまことの九州男児。

敏子
日向のいもがらぼくと。

重蔵
まっこつ。芋がらで作った木刀は何の役にも立たん。

敏子
日向女の値打ちは男で決まるとやかいね。

重蔵
任せちよかんか。

敏子
・・しのぶさんのこつを考えたたらたまらんごつある。女一人で生きていくとは・・何でこんげな男と。

重蔵
そらお前も。

敏子
まっこつ・・泣けてくる。

重蔵
・・。

重蔵が何ともいたたまれずにギターをつま弾き出す。

敏子が歌い始める。

「アカシアの雨が止む時」

※「アカシアの雨が止む時」1番を歌う

夜空に星が瞬き始めている。

祭りのお囃子が流れる。

しのぶがいつの間にか土手の上に立っている。

しのぶ　うちの娘は？

重蔵　ああ、露店に。

しのぶ　すいません。

重蔵　いやいや。

あさみが茶碗を持って戻ってくる。

あさみ　茶碗並べ終わりました。

重蔵　そうね、ご苦労さん。

あさみ　口上教えてください。

しのぶ　あさみ。

重蔵　よっしゃ、教えてやる、よう聞いちよけ。

あさみ　はい。

しのぶ　・・・。

重蔵　茶碗を手に持ってちんちん調子を取りながら。

敏子　よつ。(派手に合いの手を入れていく)

重蔵　さあさ、寄つてらっしゃい見てらっしゃい、上等の茶碗やど。ちんちん、人の幸せ何見てわかる、つるつる見事な茶碗によ、ほかほか炊きたてご飯をもつて、湯気の出方で幸せわかる。ちんちん、こげな茶碗はなかなかねえど、安い米でも高くなる、父ちゃん笑えば母ちゃん美人、じさまもばさまも踊り出す。ちんちん。

重蔵の口上に引き寄せられるように、他の登場人物達も土手の上などに集まってくる。

重蔵　茶碗も丸けりゃ、家庭は円満、角の無いのが自慢やど。夫婦喧嘩も兄弟喧嘩もつるつる茶碗で飯食えば、あつという間に消えます。茶碗買ってよ、立派な茶碗、これで幸せなら安いどが、ちんちん。つるつる見事な茶碗やど、穴もなけりゃ毛もはえちよらん、あんまり滑りがいいもんで、ハエがとまって怪我をする、ちんちん。

真弓が戻ってくる。

真弓 父ちゃん。

重蔵 ・・どうした？

敏子 顔色悪いよ。

真弓 じいちゃんが、じいちゃんが。

重蔵 親父がどんげした？

丈太郎 死んだか？

重蔵 ・・。

真弓 延岡の病院を抜け出したげな。

重蔵 なに？

真弓 雨の中、日本刀背中にしょって。油津に行くって。

重蔵 死ぬど親父。

敏子 あんた。

重蔵 人の幸せ何見てわかる、つるつる見事な茶碗によ、ほかほか・・。

敏子 しっかりせんね。

有江 はよ行ったほうがいいが。

小玉 車、車。

重蔵 あ、ああ。(便所へ)

敏子 どこ行くと？

重蔵 車ん鍵。

敏子 鍵なら私が持つちよる。

重蔵 おい。

敏子 便所に投げるわけないやろ。

重蔵 まっこつ、貸せ、乗れ。

丈太郎 重蔵。

重蔵 何か？

丈太郎 親父に伝えちよけ、油津で待つちよると。

重蔵 わかった必ず伝える。

敏子 真弓。

重蔵 親父待つちよれよ。

重蔵、敏子、真弓、車に乗り込む。

エンジン音が聞こえ車が動き出す。

丈太郎 必ず伝えろ、いいか。

返事がわりのクラクション。

車が走っている。すでに人々の姿は見えずゆれる車だけが見えている。

重蔵の声が聞こえてくる。

重蔵

それからしばらくして、親父は死んだ。晩年、愚痴ばかり言うちよった親父やが、油津の所場を取り返したと伝えたら、にっこり笑いよった。親父はあの世で誰かにご苦労さんと言うてもらえたやろうか。ゆれる車の中で俺はそんなことを考えちよった。

走る車・クラクション。

明かりが落ちていく。

おわり